

沖ノ島8号遺跡出土金銅製矛鞘の系譜

齊藤 大輔 島根県立八雲立つ風土記の丘

要旨：沖ノ島8号遺跡から出土した金銅装の鞘には、鳳凰文と唐草文を象嵌した三角穂式鉄銚が収められていることがわかった〔国宝金銅製矛鞘検討会 2025〕。金銅装の銚鞘、鳳凰文・唐草文を象嵌した鉄銚ともに類例は知られておらず、各部位の剛性が弱いこととあわせ、東アジア交流の境界祭祀を特徴づける儀仗とみなされる。

小稿では、本資料について鉄銚本体の型式学的検討を軸とし、付随する要素ごとに類例を示しながら複合体としての位置づけを考えた。そして、鳳凰文および儀仗に関わる研究にも目配りしながら、古代東アジアにおける鉄銚の最高峰であると評価した。

キーワード：沖ノ島、金銅製矛鞘、三角穂式鉄銚、鳳凰文、儀仗

1. はじめに

福岡県宗像市沖ノ島祭祀遺跡D号巨岩の岩陰で営まれた8号遺跡では、多様な奉獻品とともに金銅装の鞘に収められた鉄銚が出土した（第1次調査：1954年、図1～3）。本資料は報告書刊行当時より衆目を集めながらも〔宗像神社復興期成会 1958〕、鞘の内部が錆ついて引き抜けず、また1962年6月に第1・2次調査出土品が国宝に指定されたこともあり、ながらく型式学的検討がなされずにいた。

そうしたなか、令和6（2024）年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業「世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群における出土品金属製品のデジタル台帳および検索・閲覧システムの構築による博物館DXの推進」（採択団体：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会）の一環として実施されたX線調査、および追加でおこなったX線CT調査を通じて、鞘の内部構造が明らかとなった（図4）。その概要は共同の検討会名義で報告したが〔国宝金銅製矛鞘検討会 2025、以下「2025 報告」と記す〕⁽¹⁾、この成果は、いち早く基礎的なデータを公開することに重点が置かれており、資料の踏み込んだ考察は今後の課題とされた。小稿では、古墳時代武器研究の立場から本資料の考察を深めたい。

なお、2025 報告で示された主な論点はつぎの通りであり、それぞれのオーサiershipは註(2)～(9)にまとめる。

- ① 鉄銚本体と鞘それぞれの袋部の開口部に銀板、鞘の開口部付近には銀製の小環をつける。銚本体の袋部と銀板を貫いて、直方体の頭をもつ金銅製の鞘留が2本刺さっている。ただし、鞘留の脚は柄まではおよんでいない⁽²⁾。
- ② 鉄銚本体は身部断面が三角形の「三角穂式」、袋部の断面は九角形で、袋部の合せ目や端部の挟りは認められない。全長は286mm以上⁽³⁾。
- ③ 鞘内の鋒受け具の配置と象嵌文様から、三角穂式鉄銚の背の位置が推察された⁽⁴⁾。
- ④ 図4に示すように、鞘留は鉄銚の背に対して左右対称の位置には取り付けられていない。一方で、鞘は二つの鞘留の中央に小環が位置するように装着されており、結果として、小環と背は正対していない⁽⁵⁾。
- ⑤ 鉄銚の各面には鋒付近から袋部の端付近まで象嵌（材質は金とみられる）を施す⁽⁶⁾。
- ⑥ 身部の象嵌は唐草文、袋部の象嵌は変化した亀甲繫鳳凰文とみられ、文様および象嵌技術の特徴から6世紀後半に位置づけられる⁽⁷⁾。
- ⑦ 銚や鞘は古墳時代後期後半・末に位置づけるが、複合体としての類例はない⁽⁸⁾。
- ⑧ 本資料は、1958年の報告では「銀装金銅矛鞘」ないし「金銅銀装矛鞘」、宗像大社神宝館の展示説明などでは「金銅製矛鞘」と表記されてきたが、資料の実態を適切に表す名称として「金銅装鞘入象嵌装鉄銚」を提唱する⁽⁹⁾。

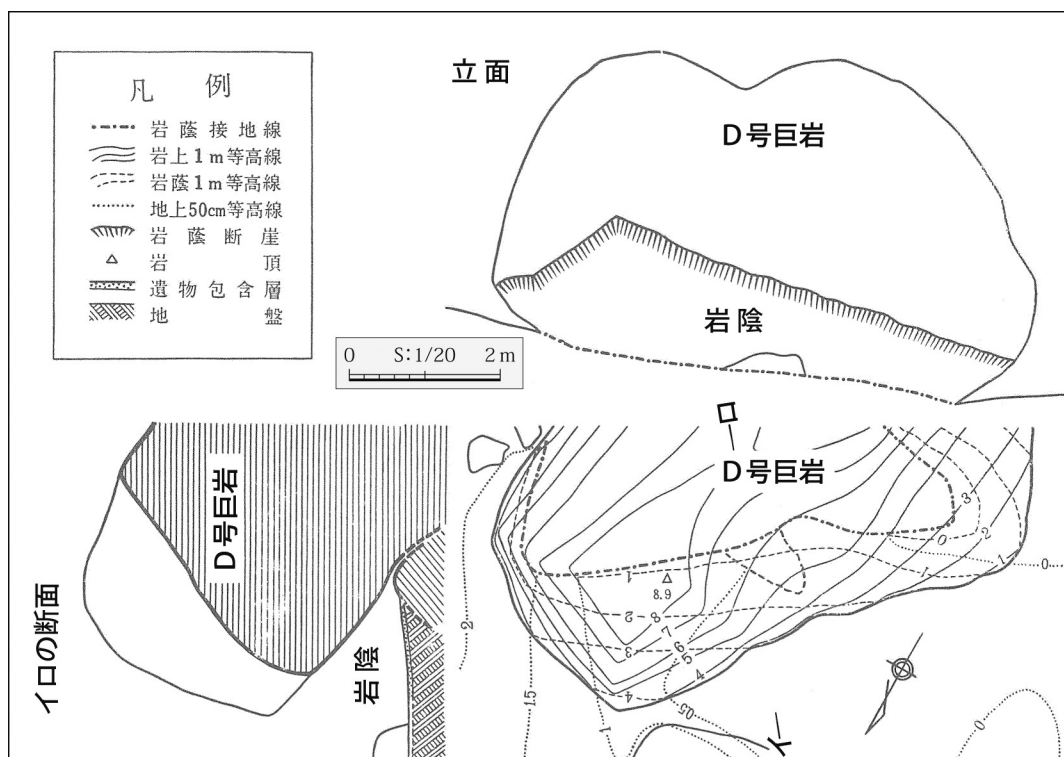
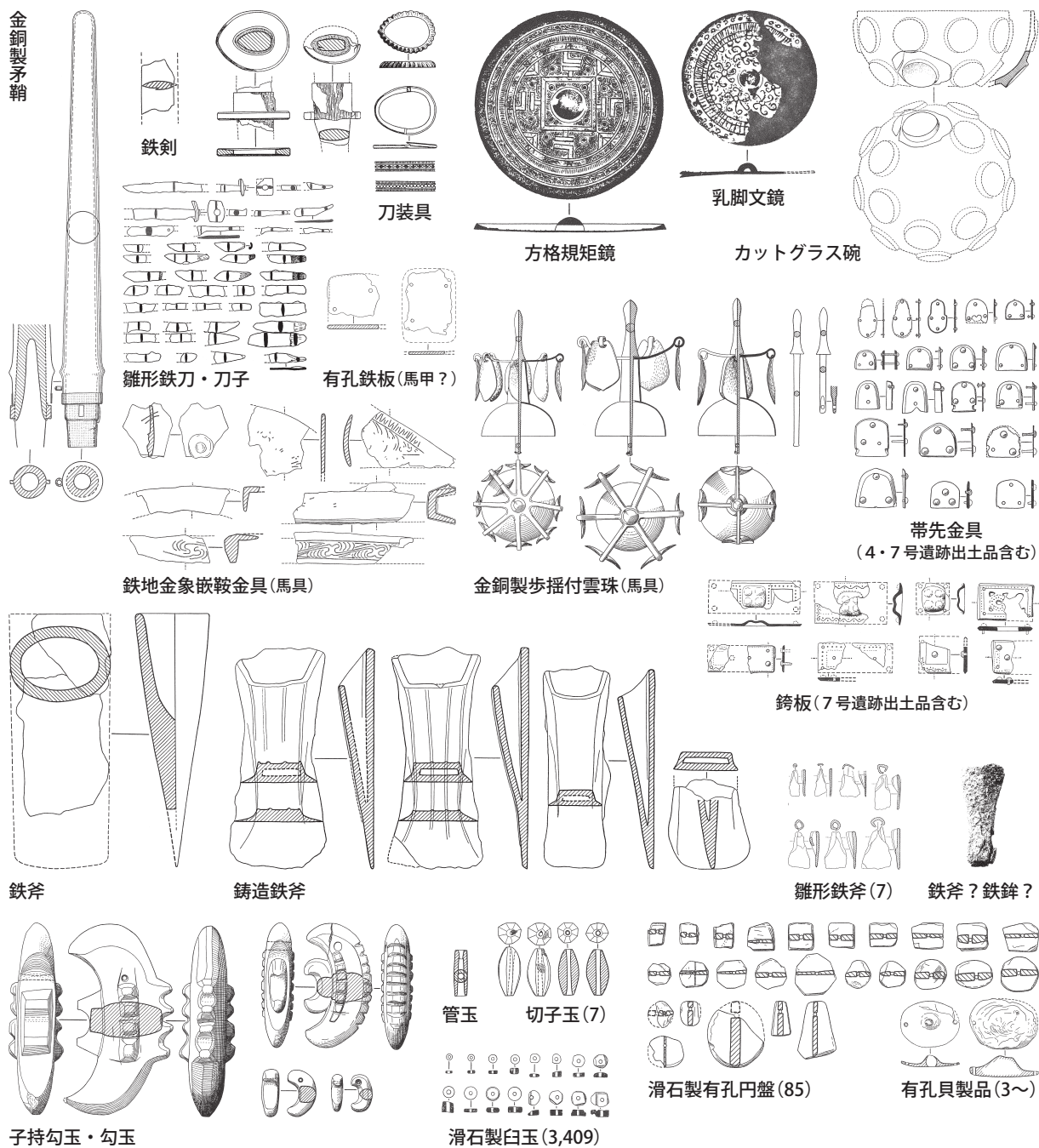


図1 D号巨岩と岩陰遺跡



図2 沖ノ島8号遺跡の奉獻品出土状況

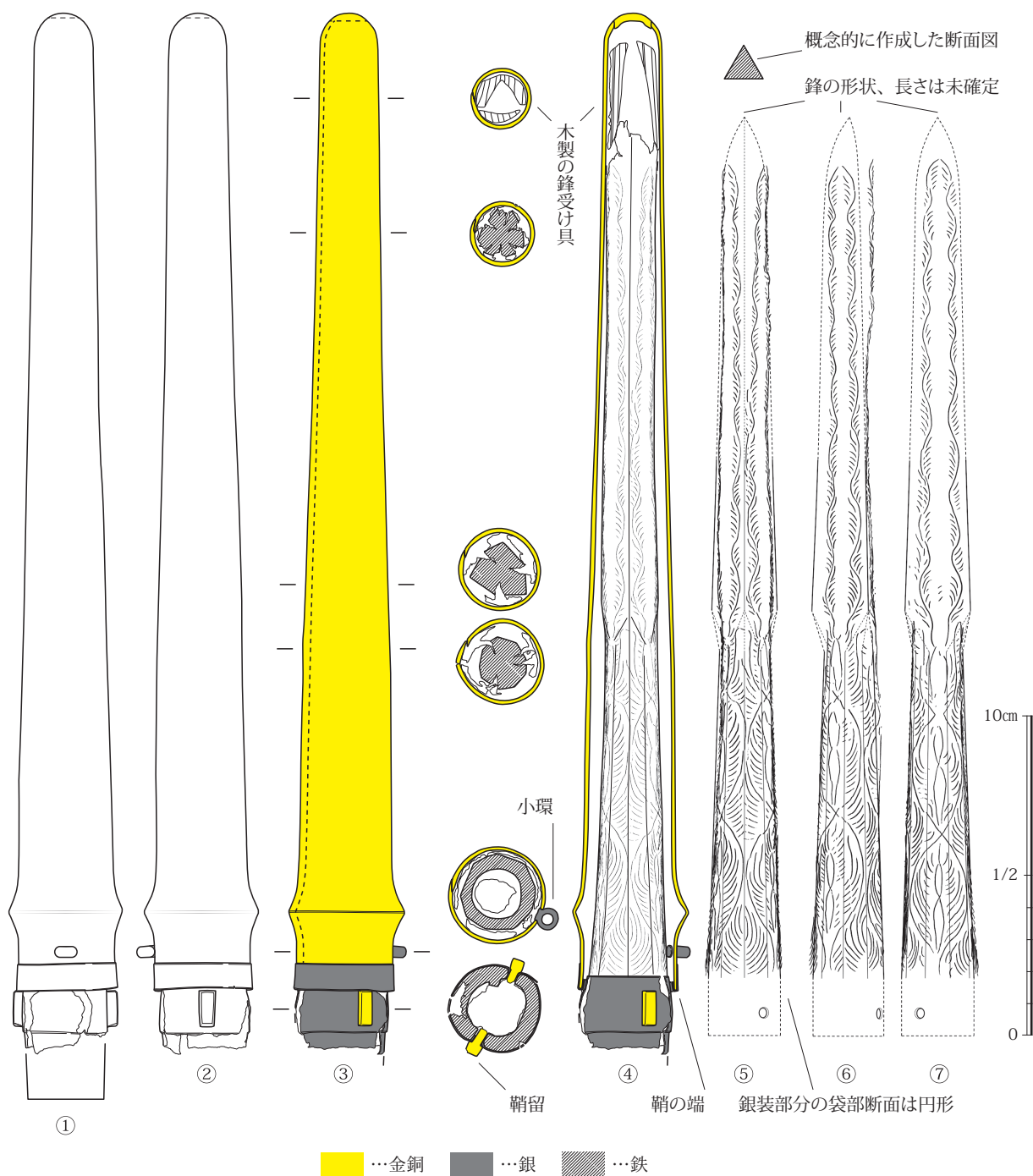


※() 内の数字は報告書本文に記された個体数

【沖ノ島8号遺跡の奉献品概略】8号遺跡では、朝鮮半島系の影響を受けた金属製刀装具やササン朝ペルシア（イラン）製のカットグラス碗が出土したことから、アジア広域の交流網に組み込まれた奉斎者像が導かれる。7号遺跡と比べて人馬に着装する武装具・馬装具のセット数が少ないこと、7号遺跡出土武器の多くは古墳副葬品と同質の真正品であるのに対して、8号遺跡では雛形鉄刀・刀子や鉄斧、玉類が目立つこととあわせ、同じD号巨岩の岩陰祭祀であっても異なる性質をもっていたと考えられる。

また、方格規矩鏡や鑄造鉄斧など、古墳時代前期以前にさかのぼりうる器物が目立つことから、8号遺跡の形成・盛行年代については各時期の奉献品を精査したうえで再検討する必要がある。

図3 沖ノ島8号遺跡の主要な奉献品



【本図観察上の注意点】 ①②は、鞘の小環を手前に向けた面を①として、②は①を通有の実測図の通り90° 展開された図である。一方、③は②から約150° 展開し、内部の鉄鉾本体の背に対して正対する位置で据えられた図である [国宝金銅製矛鞘検討会 2025]。④⑤は③と同じ角度で、④は鞘を半裁した図、⑤は鞘を取り払った図である。また、⑥は⑤に対して90°、⑦は⑤に対して180° 展開した図である。

なお、現状では1958年の報告時(図3左上)と比べ袋端部の銀板先端が欠損しており、全長が短くなっている。①下部の線は当時の写真をもとに筆者が発掘時の全長を示したものである。

図4 沖ノ島8号遺跡出土の金銅製矛鞘推定模式図(国宝金銅製矛鞘検討会2025の53頁図1、68頁図25、76頁図39より引用改変)

2. 三角穗式鉄鉾の発展的整理

金銅製矛鞘の属性は多いが、その本質は鞘に収められた「三角穗式鉄鉾」にある。以下、本形式の鉾へ対する現状での認識をまとめる。

（１）研究の推移

身部断面が三角形の鉄鉾へ対する注目は武器研究の黎明期にすでにみられ〔末永 1941、高橋 1912〕、後藤守一が鉄鉾を身の形状にもとづいて分類するなかで「三角穗形」と呼んだ〔後藤 1928〕。

1980年代に、三角穗式は6世紀前半に出現することが指摘された〔茂木 1980、臼杵 1985〕。その後は、三角穗式鉄鉾の系譜や編年をまとめるなかで、朝鮮半島との錯綜した地域間交流が生みだした倭製品であるという見解が強調されてきた〔齊藤 2015・2020、高田 1998・2001・2002〕。また、後期古墳の副葬品様式を抽出するなかで、身部断面が菱形の鎬式鉄鉾が出土する墳墓と比べて墓域の規模や共伴品の組成が相対的に優れた三角穗式鉄鉾がとりあげられるようになり〔鈴木 2018、橋本_達 2010、早野 2023〕、時期区分論や古墳時代後期における広域首長間交流を読み解くうえで一定程度の有効性をもつことも確かめられている〔齊藤 2023〕。

（２）三角穗式鉄鉾の特徴

三角穗式鉄鉾の形態的特徴として、①身部の断面が三角形をなすこと、②関が浅く、鋒から袋端部にかけて比較的直線的な輪郭を呈すること、③袋部の合せ目や目釘孔が視認しにくいこと、④袋端部に山形抉りを施す事例が知られていないこと、⑤全長に一定の規格を見出しうる一群があることなどが挙げられる。また、全長 20 cm に満たない個体が知られる一方で、中期古墳出土鉄鉾にみられるような全長 40 cm を超える大型品は含まないことも、特徴の一つとして捉えうる。まったくの同形品を示すことは難しいが、中期以前の鉄鉾と比べて斉一的で瀟洒な印象を与える形式といえる。袋部の断面が多角形をなす事例のほか、袋端部に銀板や鐔をともなう装飾性ゆたかな事例が知られることとあわせ、三角穗式鉄鉾

が儀器性を高めた武器であることをうかがわせる。これに対して、三角穗式鉄鉾の先鋒化を刺突機能の強化や特化とみる意見もあるが〔寺前 2021〕、両意見は必ずしも互いに無効化するものではない。

また、拠点的な遺跡においては2本以上の多量副葬・奉獻がしばしばみられるのに対して、小規模な古墳では単数副葬を志向することも、三角穗式鉄鉾の性格を示すありかたとして留意される。

（３）三角穗式鉄鉾の分布

三角穗式鉄鉾は日韓で 130 本ちかい事例があるが（表 1）、朝鮮半島の事例は 3 遺跡から 1 本ずつ出土しているに過ぎないため、大多数が日本列島製とみてよい。ただし、朝鮮半島出土品のうち 2 例（ソウル風納土城ナ地区 1 号住居、羅州伏岩里丁村古墳 1 号石室）が日本列島出土品の大半よりも古い 5 世紀にさかのぼる点が、その起源論を複雑にする。

朝鮮半島の事例のうち残る 1 例は、栄山江流域の前方後円墳である咸平礼德里新徳 1 号墳（6 世紀前半）から出土している。その被葬者の性格についてはさまざまな解釈があるが〔禹 2022、高田 2012、朴 2007〕、九州系の横穴式石室を主体部にもち、振り環頭大刀や広帯二山式冠など倭とのつながりを示す器物が出土したことから、その勢力基盤は倭との交流なしに成り立つものではないことはたしかである。

日本列島では、東北から九州南部までの主要な後期前方後円墳の築造地域と重なるように分布する（図 5）。水系や港湾に臨む立地の遺跡からの出土事例が多く、福岡県沖ノ島、長崎県壱岐（双六古墳）、および島根県隠岐（立石古墳）という、日本列島と朝鮮半島の境界領域を結ぶ離島で出土していることも注目される。沖ノ島や壱岐のみならず、隠岐でも 5～7 世紀の対外交流を示す資料がみられることとあわせ〔角田 2017〕（図 6）、三角穗式鉄鉾の保有者は水運に一定の利権をもっていたと考えられる。

水系や山系によって囲まれた特定の地域における分布密度は奈良盆地が最も高い（図 7）。このうち全長 60m の前方後円墳である奈良県烏土塚古墳では 3 本出土しており、近畿最多の出土数、かつ多量

表 1 三角穗式鉄鉾出土遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡概要	時期	本数	金銀装	鐳	三角穂編年
1	甲塚古墳	福島県福島市	—	6c 末～7c 初	1			第3b段階
2	中田裝飾横穴	福島県いわき市	裝飾横穴	TK209	2	銀	○	第3b段階
3	赤羽B-1号横穴	茨城県ひたちなか市	横穴墓	TK43-TK209	2			—
4	風返稲荷山古墳	茨城県かすみがうら市	前方後円墳・78m	TK209-TK217	1	銀		第3b段階
5	寺山1号墳	茨城県筑西市	円墳・40m	TK43-TK209	2			第3a段階
6	竹下浅間山古墳	栃木県宇都宮市	前方後円墳・52.5m	TK209	1			第3b段階
7	明神山10号墳	栃木県足利市	円墳・8m	TK43-TK209	2			第3段階
8	若田大塚古墳	群馬県高崎市	円墳・29.5m	6c 前	1	金		第1段階
9	綿貫観音山古墳	群馬県高崎市	前方後円墳・97m	TK43	9			第3a段階
10	八幡観音塚古墳	群馬県高崎市	前方後円墳・105m	TK209	2			第3b段階
11	鈴塚古墳	群馬県高崎市	円墳・20m	6c 後	1			第3b段階
12	壇塚古墳	群馬県前橋市	円墳・25m	6c 中	1			—
13	弦巻塚古墳	群馬県前橋市	前方後円墳・86m	5c 後～6c 前	1			第1段階?
14	不二山古墳	群馬県前橋市	前方後円墳・54.5m	6c 後	2			第3a段階
15	赤堀4号墳	群馬県伊勢崎市	円墳・22.5m	6c 末～7c 初	1			第3b段階
16	美九里中学校	群馬県藤岡市	不時発見	6c 末～7c 初	1			第3b段階
17	房子塚古墳	群馬県玉村町	前方後円墳・45m	6c 末	1			第3a段階
18	小泉大塚越3号墳	群馬県玉村町	前方後円墳・46m	6c 後	2			第3段階
19	ニツ山1号墳	群馬県太田市	前方後円墳・74m	6c 後	1			第3a段階
20	北大竹遺跡(第1号遺物集中)	埼玉県行田市	祭祀遺構	6c 後～7c	1			—
21	金鈴塚古墳	千葉県木更津市	前方後円墳・91m	TK209	2	銀		第3a段階
22	天王船塚4号墳	千葉県成田市	周溝円墳・50m 〓	7c 前	1			—
23	塚田2号墳	神奈川県南足柄市	—	TK43-TK209	3		○	第3段階
24	三ノ宮3号墳	神奈川県伊勢原町	—	7c 前	1			第3段階
25	伝・福井県若狭町西塚出土	—	—	—	1			—
26	稲荷塚1号墳	岐阜県可児市	円墳・21m	TK43-TK209	1		○	第3b段階
27	飯塚古墳	静岡県磐田市	円墳・26m	MT15	1			—
28	上神増E16号古墳	静岡県磐田市	周溝円墳・11m	TK43	1			—
29	梶ヶ谷横穴墓群	静岡県御前崎市	横穴墓	TK209	1			第3b段階
30	瀬戸1号墳	静岡県藤枝市	円墳・12m	TK209-TK217	2			第3段階
31	賤機山古墳	静岡県静岡市	円墳・32m	TK43-TK209	3			第3段階
32	いわき塚古墳	愛知県大口町	円墳・19m	TK43	1			第3a段階
33	根川1号墳	愛知県豊田市	円墳・17m	MT85-TK43	1			—
34	寺西1号墳	愛知県豊橋市	円墳・25m	TK43-TK209	3			第3a段階
35	馬越長火塚古墳	愛知県豊橋市	前方後円墳・70m	TK209	1			—
36	入田古墳	三重県津市	円墳・18m	6c 後	1			第3段階
37	井田川茶臼山古墳	三重県亀山市	—	TK10	1			第2段階?
38	甲山古墳	滋賀県野洲市	円墳・8m	TK10	1	銀?		第2段階
39	畑の前7号墳	京都府精華町	周溝円墳・18.6m	7c 前	1			—
40	小屋ヶ谷古墳	京都府福知山市	円墳・13m	TK43	1			第3a段階
41	堀切1号墳	京都府京田辺市	円墳・22m	TK209	1			第3b段階
42	河内愛宕塚古墳	大阪府八尾市	円墳・22.5m	MT85-TK209	1			—
43	山畑48号墳	大阪府東大阪市	—	TK209	1			第3b段階
44	奥山1号墳	大阪府寝屋川市	円墳・25m	TK43-TK209	1			第3a段階
45	年の神2号墳	兵庫県三木市	円墳・14.7m	TK46	1			第3b段階
46	西山6号墳(第6主体)	兵庫県三田市	前方後円墳・35m	TK10	1			第2段階
47	見手山1号墳	兵庫県豊岡市	前方後円墳・35m	TK43	1			—
48	東山1号墳	兵庫県多可町	円墳・30m	TK209	1		○	第3b段階
49	帯解狐塚古墳	奈良県奈良市	—	TK43	1			—
50	馬塚古墳	奈良県桜井市	—	6c 後				第3段階
51	竜谷8号墳	奈良県桜井市	円墳・18.5m	6c 後	1			第3a段階
52	鍋割古墳	奈良県天理市	—	TK10	1			—
53	鳥土塚古墳	奈良県平群町	前方後円墳・60m	TK43	3			第3a段階
54	牧野古墳	奈良県広陵町	円墳・50m	TK209	1			第3b段階
55	平林古墳	奈良県葛城市	前方後円墳・55m	TK43	1			—
56	伊瀬敏郎コレクション	(推定)奈良県葛城市	—	—	1			第3a段階
57	箕島1号墳(一本松)	和歌山県有田市	円墳・12m	6c 中	1		○	—
58	上塩冶薬山古墳	鳥根県出雲市	周溝円墳・77m	TK43-TK209	9			第3段階
59	立石古墳	鳥根県西ノ島町	—	6c 末～7c 前	1			—
60	定東塚古墳	岡山県真庭市	方墳・17m	TK217	4	銀	○	第3b段階
61	王墓山古墳	岡山県倉敷市	円墳・25m 〓	TK43-TK209	4		○	第3段階
62	赤井西4号墳	岡山県倉敷市	—	TK209	1			—
63	赤井南3号墳	岡山県倉敷市	円墳・17m	TK209	1			—
64	二子塚古墳	広島県福山市	前方後円墳・68m	TK43-TK209	4			第3段階
65	田戸古墳	広島県三次市	円墳・13m	TK209	1			第3b段階
66	長砂古4号墳	香川県観音寺市	円墳・13m	TK43	1			第3段階
67	経ヶ岡古墳	愛媛県四国中央市	前方後円墳・30m	TK10	1			第3a段階
68	箕田丸山古墳	福岡県みやこ町	前方後円墳・37m	TK10	1			第2段階
69	袈水1号墳	福岡県行橋市	—	TK209	1			第3b段階
70	伊田狐塚D4号横穴	福岡県田川市	横穴墓	TK209	1			第3b段階
71	沖ノ島7号遺跡	福岡県宗像市	祭祀遺跡	6c 後	2〓			第3b段階
72	沖ノ島8号遺跡	福岡県宗像市	祭祀遺跡	6c 後～7c 初	1	金銀		第3b段階
73	勝浦水押SO-01	福岡県福津市	円墳・14m	TK209	1			第3b段階
74	原口1号墳	福岡県古賀市	円墳・23m	MT85-TK43	1			第3a段階
75	宇美観音浦KS3号墳	福岡県宇美町	円墳・14m	TK209-TK217	1			第3b段階
76	片縄山丸ノ口IV-2号墳	福岡県那珂川市	円墳・12.5m	TK209	1			第3b段階
77	元岡G-6号墳	福岡県福岡市西区	多角形墳?	6c 後～7c 前	2			第3a段階
78	双六古墳	長崎県壱岐市	前方後円墳・91m	MT85-TK209	1			—
79	赤坂古墳	熊本県多良木町	円墳	TK209	1			—
80	丁村古墳(1号石室)	韓国全羅南道羅州市	円墳	5c 後	1			第1段階
81	新徳1号墳	韓国全羅南道咸平郡	前方後円墳・51m	6c 中	1	銀		第2段階
82	風納土城ナ地区1号住居	韓国ソウル	住居跡	5c 後	1			第1段階

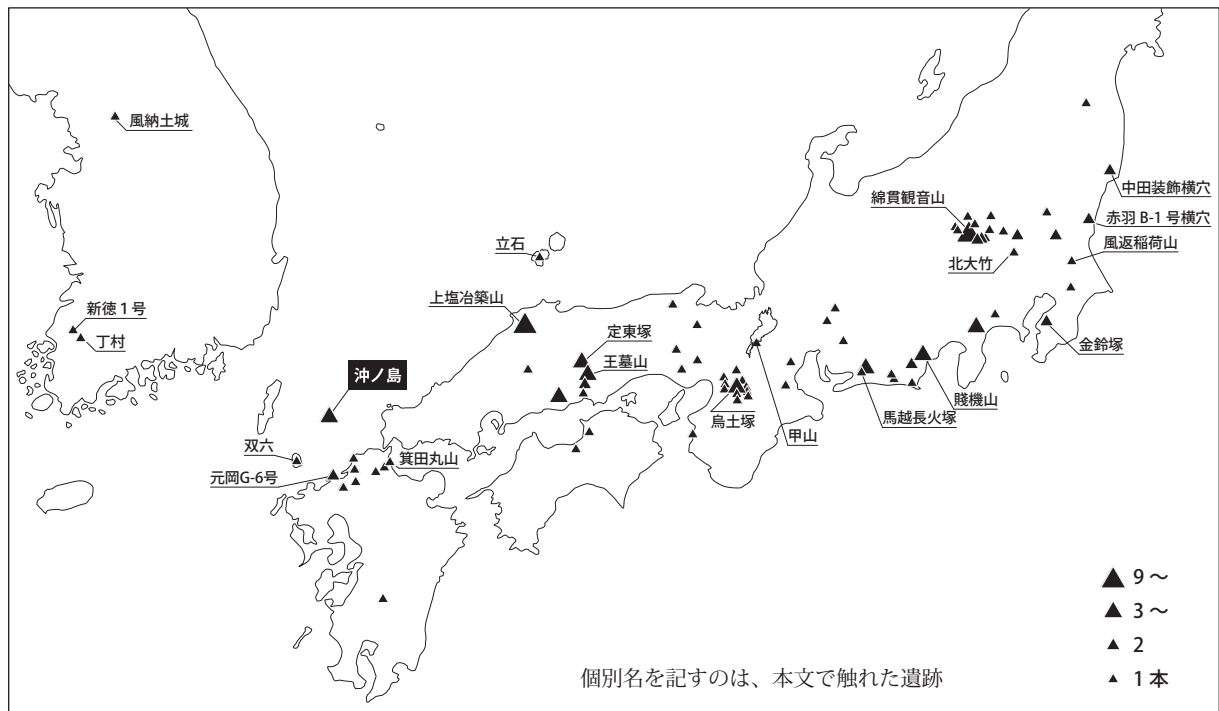


図5 三角穗式鉄鉾出土遺跡の分布

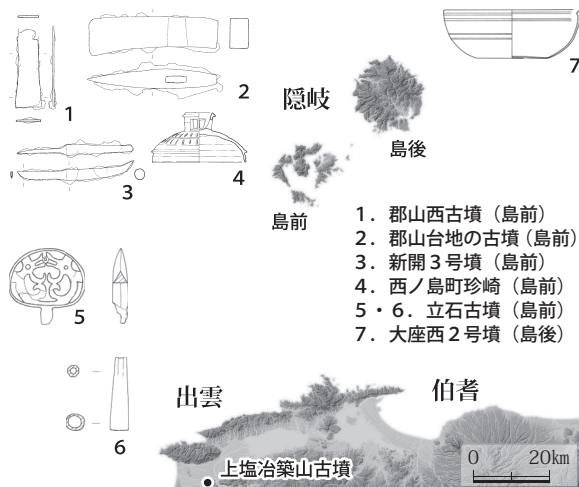


図6 隠岐における対外交流を示唆する資料

副葬の初期の事例とみられる。後期の前方後円墳が多く築かれた関東の利根川流域や九州北部（図8）も三角穗式鉄鉾の分布の核をなすほか、島根県上塩冶築山古墳と群馬県綿貫観音山古墳の9本を筆頭として、各地域の主要遺跡で多量出土が目立つ。

こうした分布相をふまえると、三角穗式鉄鉾に関わる情報は奈良盆地を有力な発信源の一つとして、各地の首長間交流網を介して地方へおよんでいったと考えることができる〔齊藤2020b〕。

（4）鉄鉾研究の量質転化

筆者は、ここまでに示した条件の推移に注目して、三角穗式鉄鉾の展開を第1段階（成立期）、第2段階（拡散期）、第3a段階（規格生産期①）、第3b段階（規格生産期②）に区分した〔齊藤2023〕。

しかし鉄鉾は属性が少なく、装飾大刀や馬具でいえば奈良県藤ノ木古墳出土品に相当するような別格の資料、あるいは編年の定点となる資料も欠く。そのため、これまでの鉄鉾に関する考察の多くは定量的根拠に拠るものであり、もちろんそこから一定の成果があがったとはいえ、出土個体数や本体の長さにもとづく論理展開は「外れ値」を許容しない点に余蘆が燻っていたのが実情である。

こうした課題も含みつつ、筆者が後期古墳編年における鉄鉾の資料特性をまとめるとともに、これまでの考察を裏づける資料を希求した矢先の〔齊藤2024ab〕、「金銅製矛鞘の再発見」であった。

刀装具や象嵌といった古墳時代の既存技術を集約しながらも複合体としての例をみない本資料は、三角穗式鉄鉾を古墳時代器物の複合編年に組み込めるとともに、従来の定量分析を定性分析へ転化することが期待される。

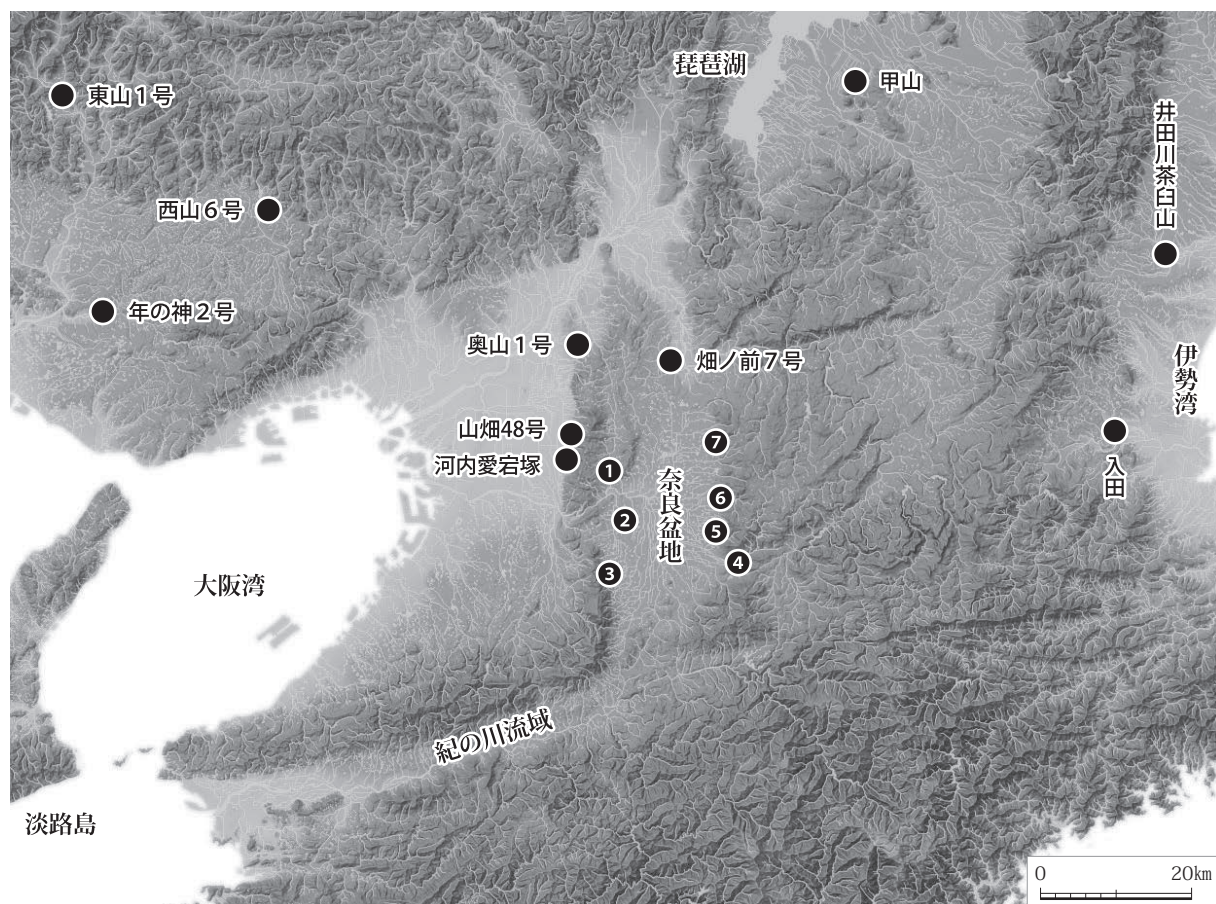
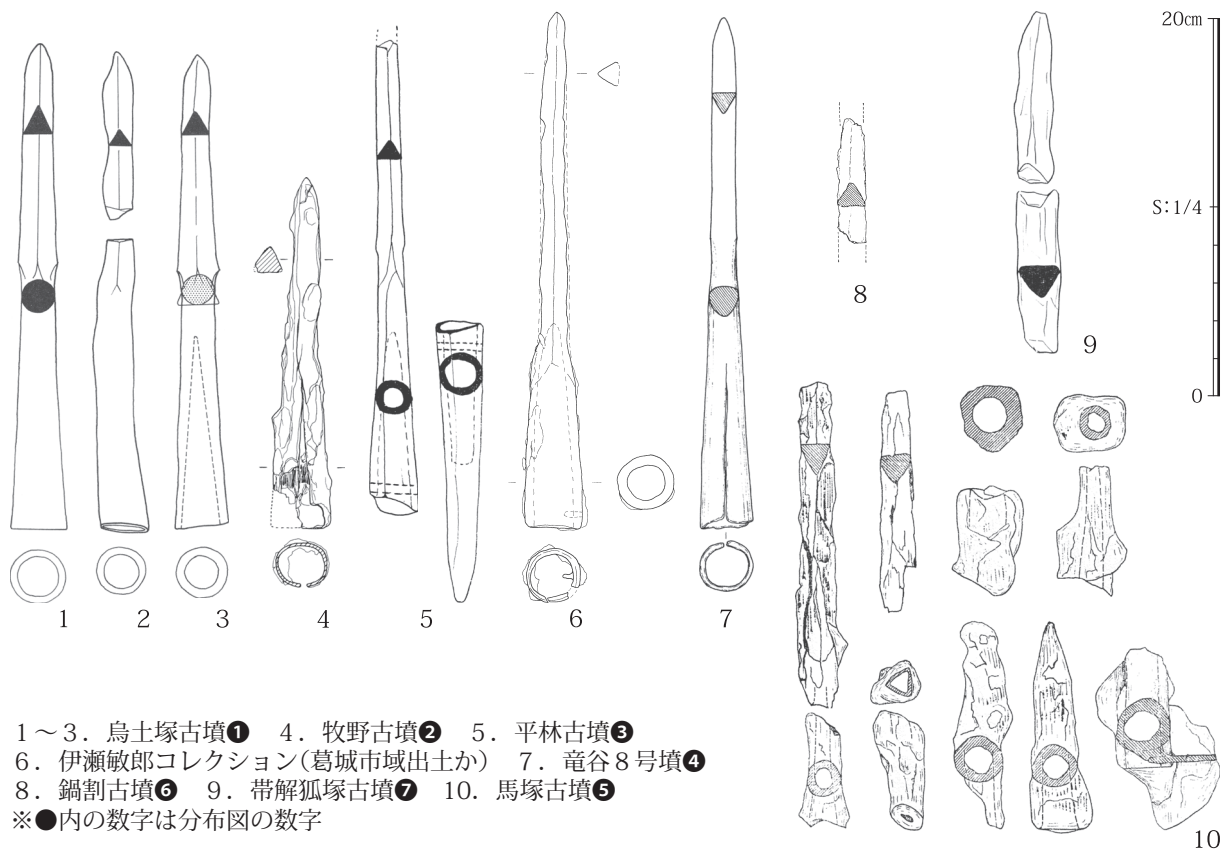
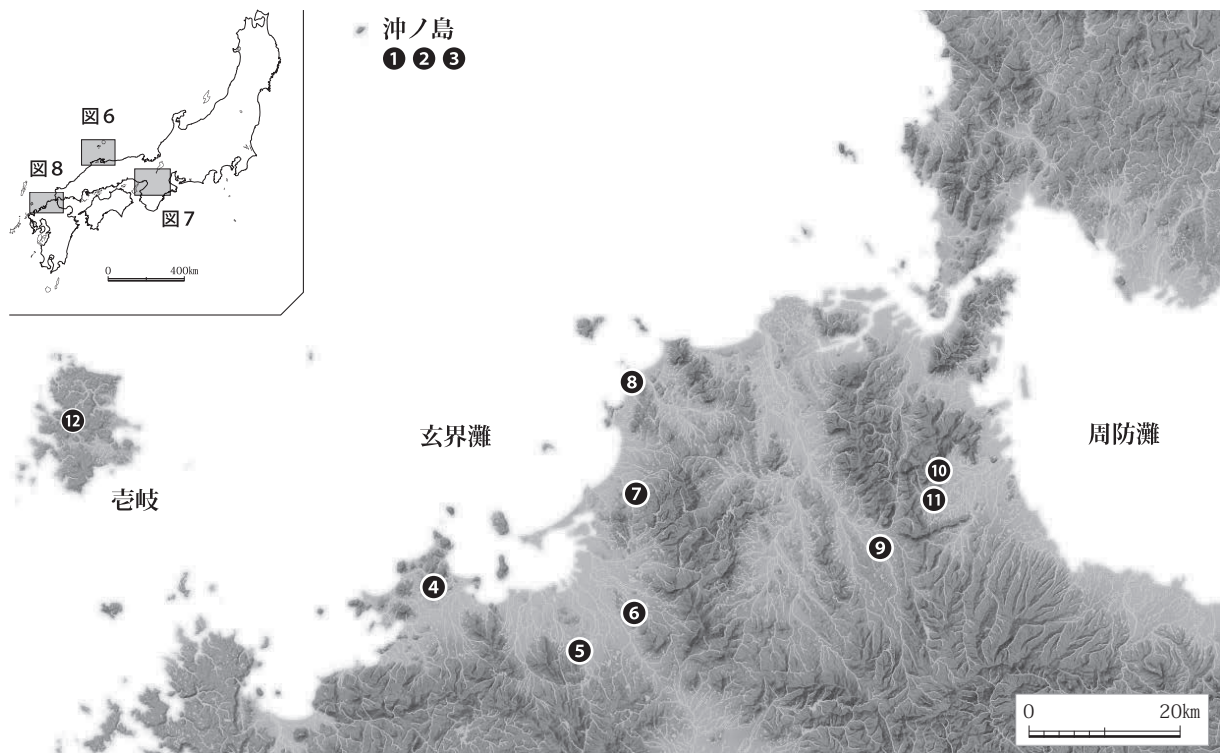
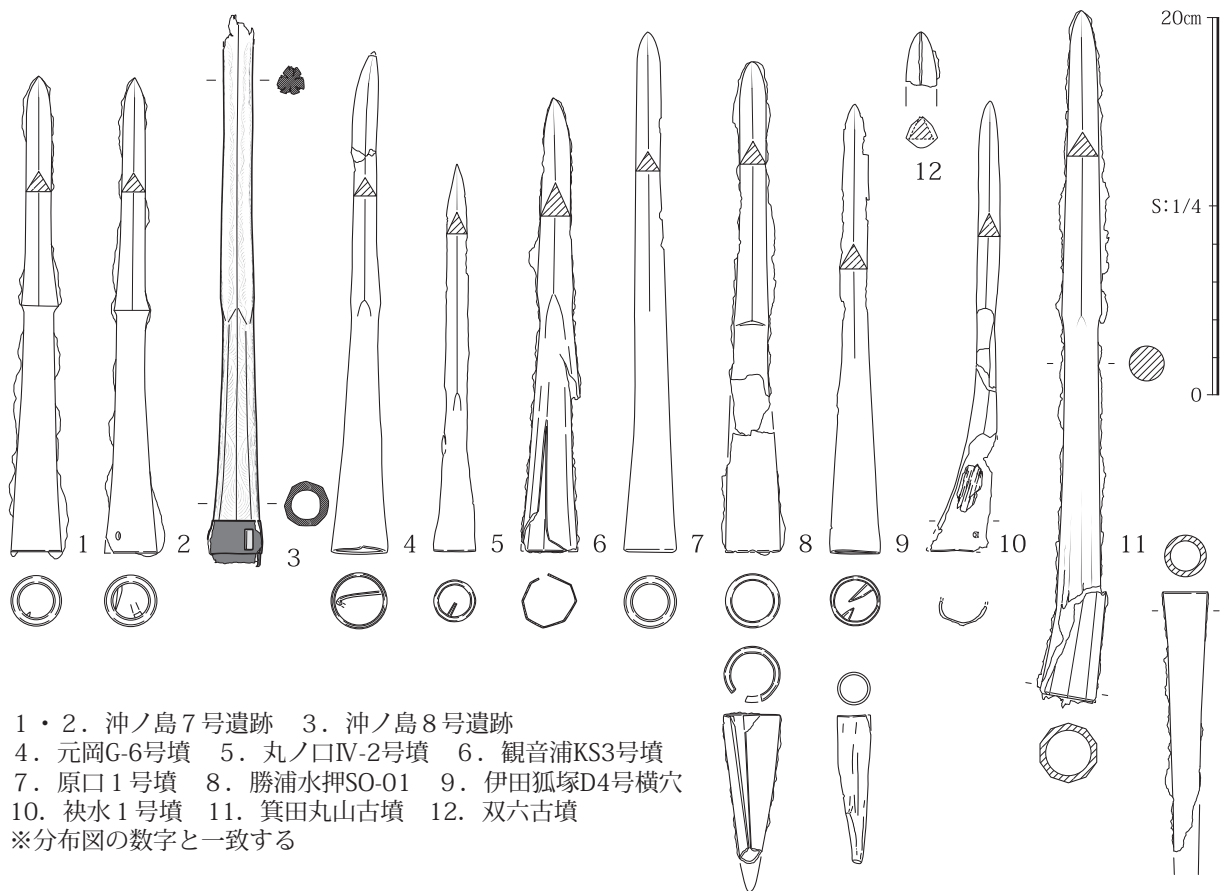


図7 奈良県域の三角穂式鉄鉾と近畿周辺の分布



3. 金銅製矛鞘の構造的特徴と階層性

(1) 鞘・銀板(図9)

金銅装の鞘をともなう鉄鉾は例をみないが、福島県中田装飾横穴の三角穂式鉄鉾は袋端部から鋒付近にいたるまでの大部分に鞘木が付着しており、銀装の環状責金具でこれを束ねる。茨城県風返稻荷山古墳や千葉県金鈴塚古墳の三角穂式鉄鉾の表面にも主軸方向に沿った木質ないしは有機質が認められ、正円形の環状金具が出土している。一部の三角穂式鉄鉾の携行・保管・副葬(奉献)にあたっては、鞘に収めるという丁寧な所作があったとみられる。

上に示した3点および金銅製矛鞘は、いずれも袋端部に銀板をともなうことでも共通する。銀装の鉾は、朝鮮半島の王陵を含む上位階層墓で出土することが多い[朴1999]。大加耶では高霊池山洞44号墳、百済では公州武寧王陵(王:523年没)、新羅では慶州飾履塚などが代表である。日本列島では5世紀初頭の鳥取県紙子谷1号墳出土品を最古の事例として、和歌山県大谷古墳、群馬県金井東裏遺跡、千葉

県禅昌寺山古墳、京都府物集女車塚古墳、滋賀県甲山古墳、大阪府海北塚古墳、埼玉県將軍山古墳、奈良県星塚古墳、千葉県金鈴塚古墳、福島県中田装飾横穴、岡山県定東塚古墳など、6世紀を中心とする有力な墳墓で出土している。

朝鮮半島の新羅・百済・加耶それぞれに銀装鉄鉾が存在する背景として高田貫太は、地域間交渉を通じて各地在来鉄鉾に「銀装」という共通した付加価値を与え、その政治的な象徴性を高めるうごきが生じたと考える[高田2002]。

日本列島でも、中田装飾横穴、風返稻荷山古墳、金鈴塚古墳、そして沖ノ島8号遺跡が、それぞれ太平洋沿岸、霞ヶ浦沿岸、東京湾沿岸、玄界灘の水運を制した最有力の首長墓ないし祭祀遺跡であることを鑑みれば、銀装品は数ある三角穂式鉄鉾のなかでも広域交流権を表象する一際格式の高い一群であったといえる[稲田2014、齊藤2020a]。金銅装の鞘をともなう鉄鉾は、これらのなかでもさらに高位に位置づけてよいであろう。



図9 鞘と銀板をともなう三角穂式鉄鉾

(2) 袋部の象嵌 (図 10)

金銅製矛鞘に収められた鉄鉾本体の袋部には、大小ふたつの杏形が縦に連なり、両側に密集する弧線、それらをまとめて囲む大きな杏形が象嵌される。2025 報告で西山要一は、栃木県足利公園古墳群の鉄装銀象嵌鞍（≒ TK209 型式期、cf. 宮代 1996）の文様を参照しつつ、膨らみのある胴と小さな頭、そしてその両側に上向きの弧線で翼をあらわす「亀甲繫鳳凰文」とみた。そして、大刀にみられる亀甲繫鳳凰文の変化をまとめ、鳳凰文は体全体を描くものが古相を示すとし、本資料を 6 世紀後半に位置づけた。また、技術面からも象嵌線の幅は広いものから狭いものへ、鑿一打（ピッチ）の長さは長いものから短いものへ変化するとし、6 世紀後半から飛鳥時代への過渡期に位置づけられるとした（表 2）。

このほかにも象嵌を施す古墳出土鉄鉾として大阪府百舌鳥大塚山古墳（5 世紀）と愛媛県東宮山古墳（6 世紀）の例があるが、この 2 例は幾何学的な小円文を局所的に施すものであり、金銅製矛鞘との水準の隔たりが大きい。本資料の系譜を追ううえでは、

鳳凰文の故地である中国大陆の図像資料と対比する必要があるだろう。

古墳・三国時代の金工品にみられる鳳凰文の多くは横を向くのに対して、本資料の鳳凰文は正面を向く。鳳凰は朱雀とも表現され、正面を向いた朱雀文を東潮は「静止形象朱雀」〔東 2000〕、両脚を揃えて伸ばす表現を網干善教は「静止」と呼ぶ〔網干 2002〕。静止形象朱雀は、中国東魏・北斉の茹茹公主墓（550 年）や北斉の堯峻墓（571 年）に代表される墓壁画を初現とし、盛唐（712-765 年）にかけて継承されるなかで装飾化や唐草文化が進んだ。

西山の報告を受けるかたちで、本資料の製作の上限年代を検討する。鳳凰文は北斉の初期資料より唐草文化が進んでおり、縦長杏形の体躯は盛唐の図案にちかい。足利公園古墳群の鞍の文様より便化しているとみれば TK209 型式期（6 世紀末～7 世紀初頭）を上限とする。象嵌線の幅・鑿一打の長さも、570 年製作の福岡県元岡 G-6 号墳出土庚寅銘大刀、608 年製作の兵庫県箕谷 2 号墳出土戊辰年銘大刀より新相を示す。これは鳳凰文の変化傾向とも矛盾しない。

表 2 象嵌線の幅・鑿一打の長さ（2025 報告の西山報文に、〔尾崎 2018〕〔西山ほか 1996〕の記述を追加して作成）

資料	遺跡	年代	象嵌線の幅	鑿一打の長さ	材質	典拠
漢中平紀年大刀	奈良・東大寺山古墳	後漢製(184~189年)	0.5~0.8mm	1.0~1.2mm	金	2025 報告
七支刀		百濟製(369年)	0.4~0.5mm	1.0~1.2mm	金	2025 報告
辛亥年銘鉄剣	埼玉・稻荷山古墳	倭製(471年)	0.8~1.0mm	1.0~1.2mm	金	2025 報告
額田部臣銘大刀	島根・岡田山 1 号墳	倭製(6 世紀後半)	0.7~1.2mm	1.0mm	銀	2025 報告
庚寅銘大刀	福岡・元岡 G-6 号墳	百濟製か(570年)	0.3~0.5mm	—	金	尾崎2018
戊辰年銘大刀	兵庫・箕谷 2 号墳	倭製(608年)	0.3~0.5mm	1.0~1.1mm	銅	西山ほか1996
金銅製矛鞘	福岡・沖ノ島 8 号遺跡	倭製	0.28mm	平均 0.87mm	金?	2025 報告
三寅劔		飛鳥~奈良(7~8 世紀)	0.25mm	0.4~0.5mm	金・銀	2025 報告
禰祭劔(ばさいのつるぎ)		鎌倉~室町(14~16 世紀)	0.5mm以下	0.4~0.5mm	金・銀	2025 報告



1. 慶州・飾履塚(飾履) 2. 栃木・足利公園古墳群(鞍) 3. 福岡・沖ノ島 8 号遺跡(鉾) 4. 陝西・韋氏墓(壁画)

図 10 金銅製矛鞘の亀甲繫鳳凰文と関連資料

(3) 身部の象嵌 (図 11)

金銅製矛鞘に収められた鉄鉾の身部3面には、左右対称を意識した一対の波状線、およびその谷部を充填する短い弧文（おおむね4～7本で一単位）が象嵌される。その祖型についてはなお議論する余地が残るが、ここでは2025報告で示された「唐草文」とみる西山要一の意見を前提として私見を述べる。

結論をいえば、筆者は、鞘をともなう長柄武器の先端に植物文をあしらう発想として、古墳時代中期以前にさかのぼる「儀仗」あるいは「石見型立物」と呼ばれる木製品・埴輪の形象を読みとる。

これらの用語や性格については決着をみないが、筆者をこのような着想に導いたのは、藤田和尊らが検討した奈良県御所市鴨都波1号墳の「ヤリの鞘」である。鴨都波1号墳では粘土槨の棺外から鉄ヤリ2本が出土し、それぞれの先端には鞘装具の漆膜が良好な状態を保っていた。とくに「鍵1」の鞘装具は、逆台形の台部にY字状に開く角状突起がついており石見型製品と共通する〔藤田・木許2011〕。このことをもって、用途が不明な「石見型」とされる資料を一律ヤリ装具とみる藤田・木許の見解に対しては樋上昇による的確な批判があり〔樋上2024〕、たしかに藤田・木許による想定 of 普遍性については慎重を期すべきである。しかし、それ以上に筆者は、たとえ少数ではあれ石見型のヤリ鞘が存在する事実、そして三重県松坂市宝塚1号墳の船形埴輪や奈良県桜井市小立古墳の木製品にみるように、石見型が倭装大刀という最高位の武器と一式で運用される事例が存在する点に注目する。

穂積裕昌も長柄武器の儀仗化プロセスを考えるうえで鴨都波1号墳のヤリ鞘に注目するほか〔穂積2018〕、寺前直人も、土製品や木製品にみる武器のデフォルメ志向を検証し、石見型木製品はヤリを表象したものとみる〔寺前2025〕(図11)。ただし、穂積と寺前の見解は、藤田・木許説を無批判に首肯するものでもなければ、樋上による藤田・木許説批判を無効化するものでもないことに注意を要する。

坂墳は、奈良県大和郡山市水晶塚古墳(6世

紀前半)における鳥形立物と石見型立物を用いる情景を復元し、古墳とその外部をつなぐ結界の標識として樹立したと考えた〔坂2008〕(図12)。鳥形と石見型の組みあわせに、筆者は金銅製矛鞘に収められた鉄鉾の象嵌文様を重ねる。奈良県御所市極楽寺ヒビキ遺跡(5世紀前半)で検出された「祭政空間に面して立つ3本の大柱遺構」の情景を復元した辰巳和弘も、鴨都波1号墳のヤリ鞘に配慮しつつ、貴人の祭政空間を象徴する聖標として杖や鉾に見立てた大柱が建てられたと想定し、大柱の「かたち」の候補に石見型立物を挙げている〔辰巳2010〕。

なお、境界祭祀における杖の表象については、大正・昭和期に日欧の神話研究を集大成した松村武雄の研究に詳しく〔松村1930〕、考古学からは岩松保が松村の研究を引きつつ遺構・遺物に境界儀礼の痕跡を積極的に読み取ろうとする〔岩松2016〕。

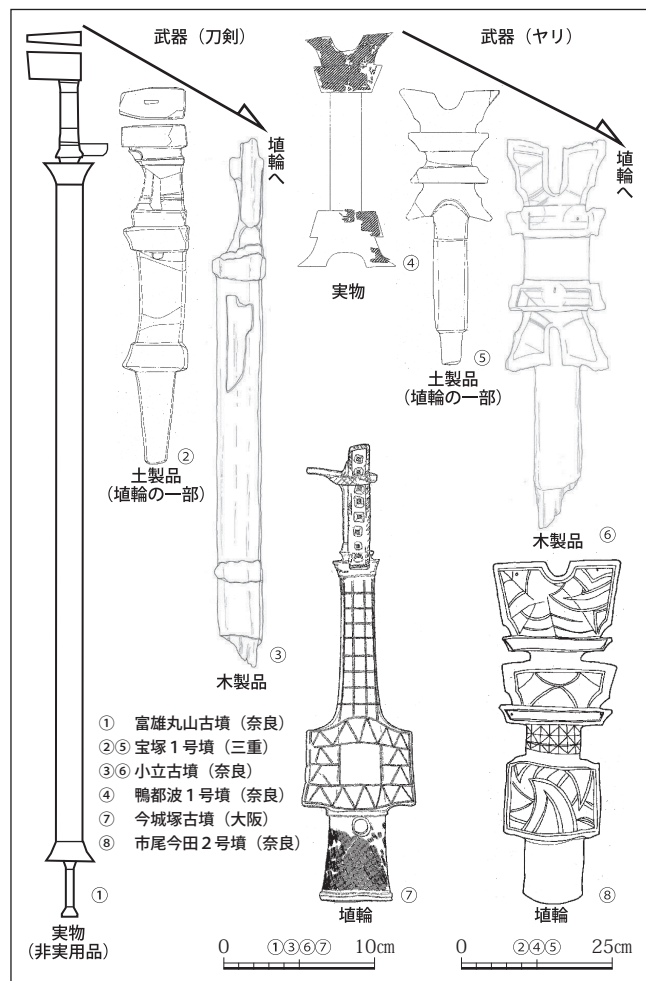


図 11 武器の実用的大型化と木製品・土製品による模倣

さらに、樋上〔2006〕が石見型の儀仗の祖型とみた朝鮮半島東南部の鉄製品（有刺利器）の発想については、かつて金元龍が、新羅王陵から出土する「出」字形冠について樹木を図案化したものと捉え、ユーラシアの金工芸術にみられる「樹木崇拜思想」にもとづくものと考えたことにヒントがあるかもしれない〔金元1972、144頁〕。

ここまで挙げて、強力な個性をもつ資料群の起源を一点に絞り込むことは容易でなく、堂々巡りに陥る恐れもある。ただ、福岡県福岡市博多区三築遺跡の河川跡より出土した木製鉾は（図13）、柄部分

は欠損したのか、そもそもなかったのか詳らかでないが、60 cm以上の大型品で先端が尖り、左右両側に4か所の突起をもつ。中心軸には鑄があり、断面は菱形をなす。細かい時期は不明だが、古墳時代の層位に属するという。両側面の突起、およびその間のくびれは、象嵌装鉄鉾の身部の文様と通ずるものがある。本節で触れたような視点をもって見直すべき資料であろう。金銅製矛鞘についても鉄鉾の型式組列だけでなく、儀仗や境界碑という大きな観念のなかで理解すれば、歴史的に孤立した存在とは言えなくなるのではなかろうか。

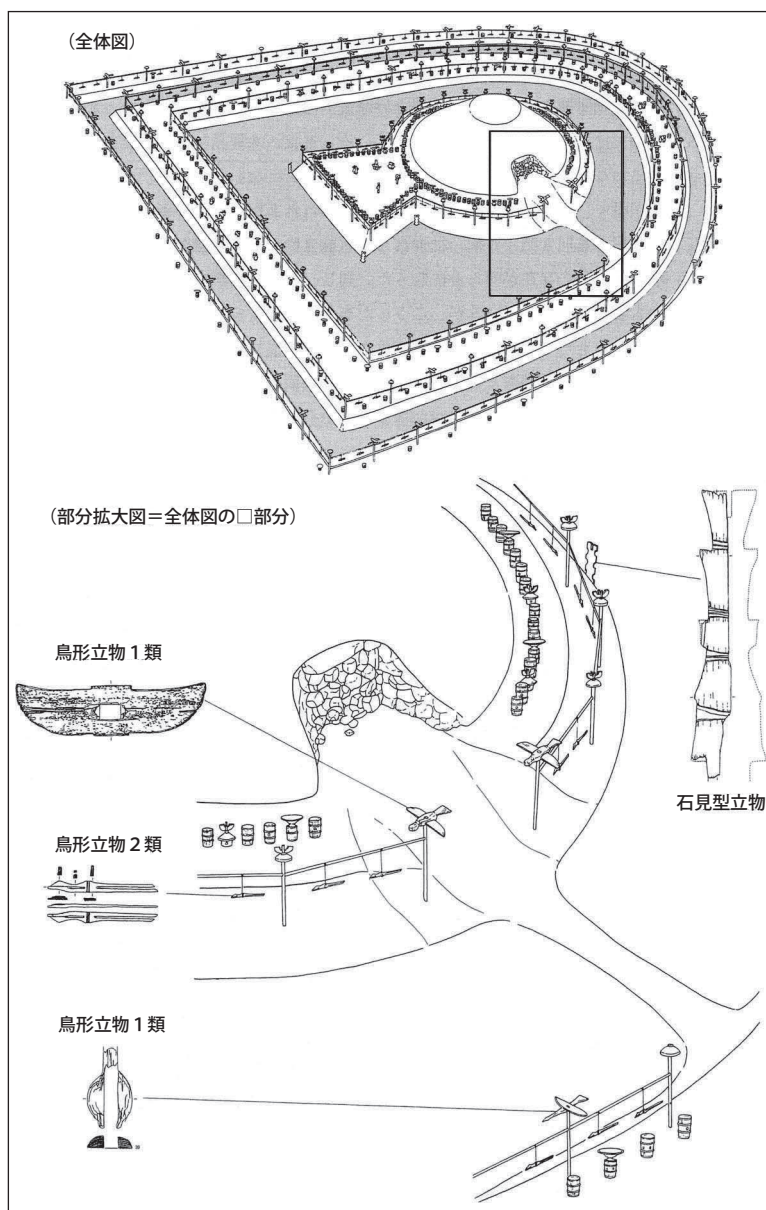


図12 埴輪・木製立物樹立状況の復原（モデル：水晶塚古墳）

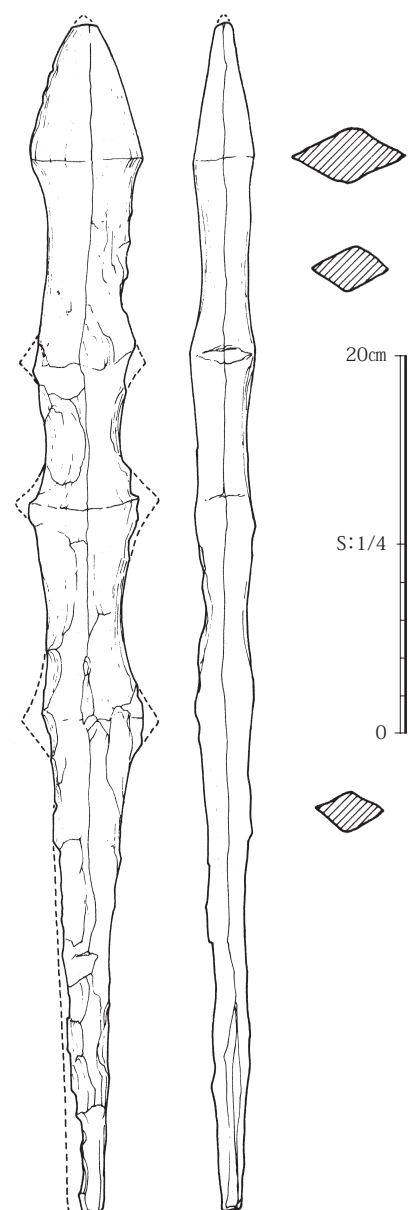


図13 三築遺跡出土の木製鉾

(4) 小環の用途

鞘口ちかくの小環は大刀吊金具の環と似るが、どのような用途を考えるであろうか。

高句麗の武装発展期〔金_姓2013〕にあたる薬水里古墳壁画（4世紀末～5世紀初頭）の出行図は牛車に乗る王と、その衛兵の装いを描く（図14）。このうち王からみて右側にならぶ軽騎兵の鉦には旗がたなびくのに対して、後列に密集する重装騎兵がもつ鉦には旗はともなわない。旗のついた鉦は儀仗的な意味合いが色濃いのであろう。

高句麗の軍事制度では軍団のことを「幢^{とう}」と呼んだが、そもそも幢とは軍団の先頭に掲げる「旗」、いわば軍事徽章を指す〔田中2001〕。高句麗の諸制度を模倣した新羅でも、軍団長の職名に「軍師幢主」「歩騎幢主」「大匠尺幢主」などがみえ、最大の王陵である皇南大塚南墳出土品においても長柄武器が武

装の主力を占めていた〔齊藤2013〕。

また、平安時代以来、伊勢神宝として命脈を保ってきた鉦には、柄につけられた環に「比^ひ礼^れ」と呼ぶ旗を結び垂れる（図15）。時期や地域、あるいは王権によって鉦の運用形態に違いがあったとみるべきながら、金銅製矛鞘の小環にも装飾性ゆたかな旗ないしは垂飾を結ぶことにより、倭や沖ノ島祭祀の徽章としていた可能性を示しておきたい。

なお、金銅製矛鞘の用途については沖ノ島5号遺跡から出土した東魏（534-550）様式の金銅製龍頭にとみなう「石突」とみなし、両者が一体の旗竿を構成したとみる考察もあったが〔弓場1985〕（図16）、このたびの研究をもってその想定は成立し得なくなった。ただし、両者の開口部の径はおおむね3cmとちかしいことから、各々類似する柄を挿入していたことに違いはなさそうである。薬水里古墳壁

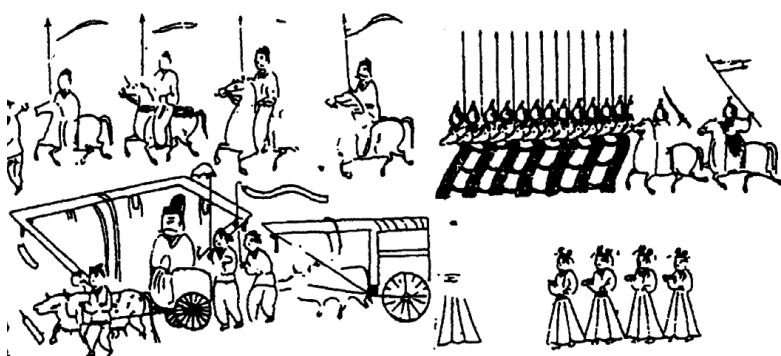


図14 薬水里古墳壁画の出行図（一部）

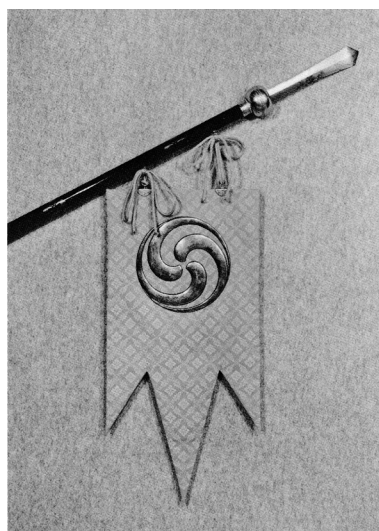


図15 伊勢神宝の鉦

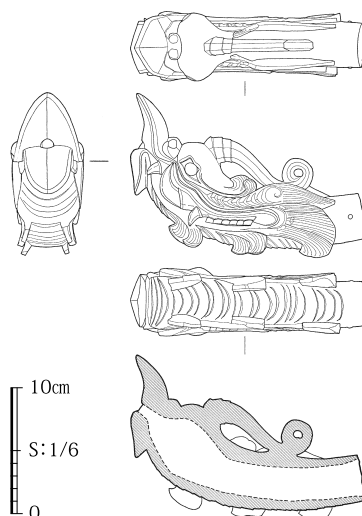


図16 沖ノ島5号遺跡出土金銅製龍頭（左）と
敦煌莫高窟159窟東壁南側の維摩变相図の一部（右）



画の王の背後には、龍頭らしき表現のある竿を掲げた人物と、騎兵よりも長い旗をたなびかせる人物がならび、王の威容を際立たせる。5号遺跡と8号遺跡の年代差は詳らかでないが、旗をつけた鉾と龍頭をつけた竿が同一の祭祀空間に存在した可能性には留意すべきであろう [cf. 岡崎 1979]。

(5) 日韓の三角穂式鉄鉾の比較 (図 17)

日韓の代表的な三角穂式鉄鉾である沖ノ島8号遺跡例と新徳1号墳例には、いくつかの共通点がある。

まず、全長は両者とも 30 cm 内外と、三角穂式鉄鉾のなかでは大型の部類である。沖ノ島8号例は身部の三面に象嵌、新徳1号例は樋をとまなう。袋部の断面は、前者は九角形、後者は八角形である。断面が奇数角形の袋部は、偶数角形のものよりも製作が難しいと思われるが、いずれも袋端部に銀板を被せるほか、直方体の頭をもつ金具2点をともなう。

断面が多角形の袋部や、銀板をとまなう鉄鉾は有力な墳墓出土品にみられるが、身部の三面に象嵌や

樋を施す事例は現状では類例がなく、それぞれの個性を高めている。袋端部ちかくに差し込まれた直方体の頭をとまなう金具にも注目すれば、この2例はちかしい製作規範をもっていたと考えられる。なお、韓国慶州飾履塚でも銀板と留金具をとまなう鎬式鉄鉾が出土している。銀板の大きさは3例とも似ることから、やはり一定の規格があった可能性がある。

(6) 鉾の階層性

本章までに示してきた、同一形式の鉾へ対するつくりこみ度合いの高低は、出土遺跡の規模や共伴品が示す被葬者の性格の違いともおおむね親和的である。図 18 に示すように、さまざまな既存技術・意匠を兼ね揃えた金銅製矛鞘がそうした序列を規定する。主としてⅠは国家祭祀、Ⅱ・Ⅲは外交に長けた広域首長権、Ⅳは群集墳を含めた地方首長権の担い手による保有類型であろう。

ただし、そもそも形式や型式を問わず鉾の保有そのものがすでに大多数の非保有層へ対する優位性をもち、Ⅱ・Ⅲ類型においても屯倉管掌者や国造級の首長墓を含みうることに留意されたい。

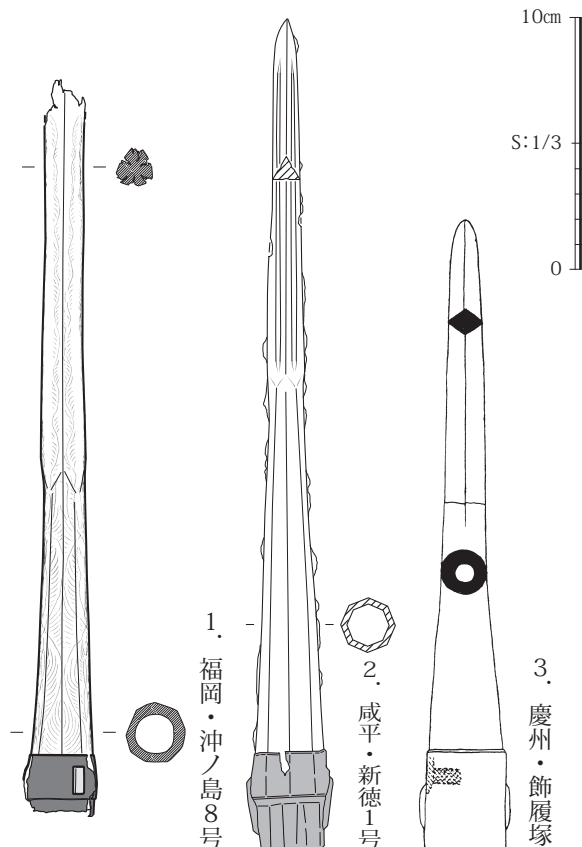
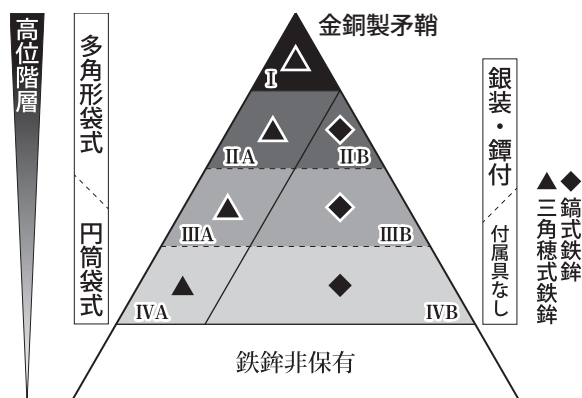


図 17 日韓の銀装鉄鉾



【各類型の代表的遺跡】

- Ⅰ 沖ノ島8号 (袋部断面九角形・銀装・象嵌・金銅鞘)
- Ⅱ A 新徳1号 (袋部断面八角形・銀装・樋)
金鈴塚 (袋部断面九角形・銀装・鹿角)
- Ⅲ A 箕田丸山 (袋部断面十角形)
綿貫観音山、上塩冶築山 (袋部断面八角形)
塚田2号、王墓山 (袋部断面円形・鐔)
定東塚 (袋部断面円形・銀装鐔) など

図 18 古墳時代後期における鉄鉾の階層性

4. 三角穗式鉄鉾の歴史的評価

三角穗式鉄鉾全般の時空間的位置づけと、金銅製矛鞘の歴史的評価をまとめる。装飾大刀装具との折衷を認める立場から、時期区分は古墳時代刀剣様式の諸段階〔齊藤 2022〕に従う。

(1) 時系列的位置づけ (図 20)

Ⅳ期 (TK23-TK47 型式期) 実年代は、おおむね 470 年代～ 490 年代。三角穗式鉄鉾第 1 段階、および倭装大刀の大型化達成期。現状で当該期の三角穗式鉄鉾は韓国出土品にかぎられるが、風納土城、丁村古墳ともに倭との接点を認めうる遺跡であり、錯綜した日韓交流のなかから出現したと考えられる。

Ⅴ期 (MT15-TK10 型式期) 実年代は、おおむね 490 年代末～ 550 年代。三角穗式鉄鉾の第 1～2 段階。この段階までに中期的な鉄鉾の様式が解体され、倭製の主要鉄鉾として三角穗式鉄鉾が置換されていく。振り環頭大刀の確立期にもあたり、いずれも継体期における威信継承・創出両戦略〔福永 2005〕の余波を受けたと考えるが、三角穗式鉄鉾の絶対数をみれば、規格生産体制や階層分化の整備は比較的ゆるやかなうごきであったと考えられる。

Ⅵ期 (MT85-TK43 型式期) 実年代はおおむね 550 年代末～ 590 年代。三角穗式鉄鉾第 3a 段階。全長規格（おおむね 27 cm 前後）が整いはじめ、列島各地の有力首長墓に副葬される。分布の核は奈良盆地にあり、三角穗式を上位、鎬式を従属的階層に据えた鉄鉾の階層分化も進む。

刀剣では、倭装大刀の荘厳化が最高潮を迎える。さらに、倭装大刀を基礎としつつも朝鮮半島系要素の影響を受けた「折衷系大刀」の出現〔橋本^英 2006〕、装飾付環頭大刀の増加など、様式の多様化が進む。その背景には、欽明 23 (562) 年の大加耶滅亡にともなう装飾大刀・馬具工人の亡命や、大伴連狭手彦が高句麗の王宮から「金飾刀二口」を略奪して蘇我稲目に献上したことなどを考えうるが〔金^宇 2017、清水 1983〕、古墳時代後期後半の倭における刀剣秩序の源流は、中国北周 (556-581 年) における環頭大刀を用いた皇宮警衛の制にあらう〔藤井

2025、町田 1976〕。

Ⅶ期 (TK209 型式期) 三角穗式鉄鉾第 3b 段階。短小化（おおむね 25 cm 以下）、多量副葬、群集墳への副葬を志向しつつ、東日本を中心とする首長間交流網や首長系譜の維持にも組み込まれた。推古期 (593-628 年) の外交にともなう儀仗隊の整備や大規模な軍事動員を表象したとみられる銀装の武器〔齊藤 2020a〕 (図 19) をはじめ、金銅装馬具や銅腕など、この時期に特徴的な最上位品目との共伴／共存事例も注目される。倭装大刀の副葬は衰退し、金銅装頭椎大刀・双龍環頭大刀が盛行する。金銅装大刀の多くは 2 個の単環付足金具と丸尻の鞘を組み合わせた横位佩用を標準とし、従来の縦位佩用からの服飾変化が認められる。実年代は、おおむね 590 年代～ 610 年代。

このうち沖ノ島 7 号遺跡の刀剣様式はⅤ～Ⅶ期、8 号遺跡はⅥ・Ⅶ期にあたるが、金銅製矛鞘の小環や丸尻の鞘はⅦ期の装飾大刀の特徴である。Ⅶ期の三角穗式鉄鉾は短小な資料が多いが、千葉県金鈴塚古墳や群馬県房子塚古墳といった前方後円墳では 30 cm ちかい資料も出土しており、金銅製矛鞘を無理に古く位置づける必要はない。この段階には鉾の保有／非保有だけでなく、その長短による序列もあった可能性がある。

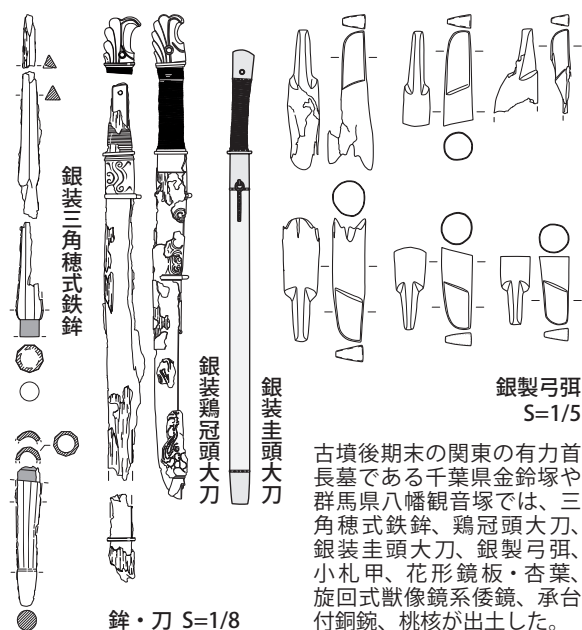


図 19 千葉県金鈴塚古墳から出土した銀装の武器

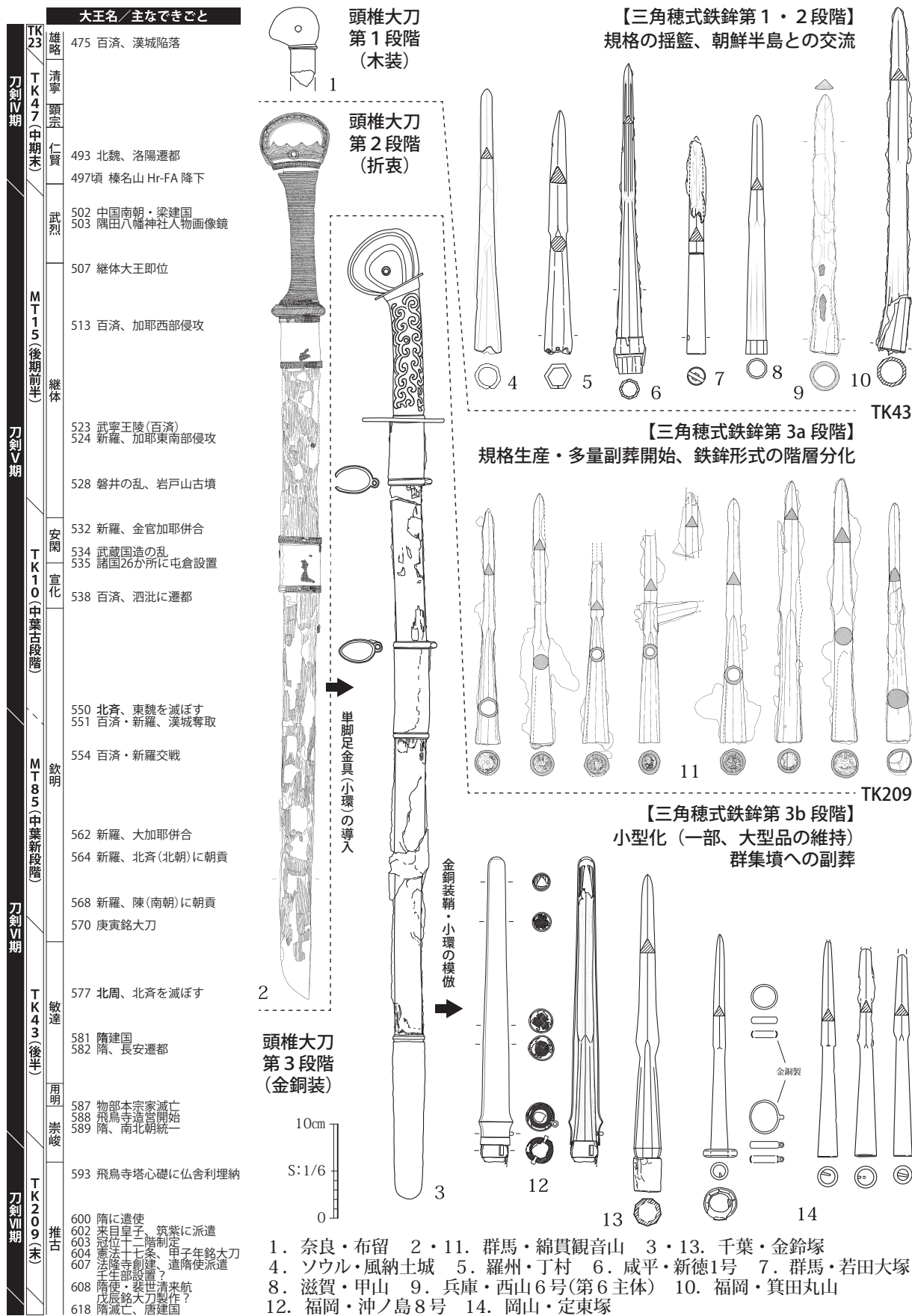


図20 装飾大刀と三角穂式鉄鉾の並行関係

（２）空間的位置づけ

微視的視点 鉄銚が出土した祭祀遺跡として、福島県建錫山遺跡や静岡県天白磐座遺跡、埼玉県北大竹遺跡が知られる。建錫山遺跡高木地区では、2,000点ちかい滑石製品、銅鏡1面、わずかな鉄製刀剣片とともに鉄銚が1本出土した。天白磐座遺跡「岩A」のⅠ区では200点ちかい手づくね土器、Ⅱ区では鉄銚1本が出土した（図21）。沖ノ島以外における祭祀遺跡からの三角穂式鉄銚出土事例は、北大竹遺跡第18次B区第1号遺物集中が現状で唯一とみられ、12点の滑石製子持勾玉や海獣葡萄鏡などとともに身部片が出土している。いずれも祭祀用の石製品や手づくね土器の量に圧倒されるが、稀少な金属製品に占める銚の割合は、古墳副葬金属製品に占める銚の少なさに比すと低くはない。とくに金銅製矛鞘の場合、境界碑としての聖樹や「神の依り代としての鳥装」[鈴木1999、491頁]にその本質を求めうるならば、祭祀空間へ対する銚の奉獻は、墳墓の築造や軍事とは異なる論理にもとづいた倭王権の領域展開を反映するとみられる。

巨視的視点 九州北部では、玄界灘や周防灘に沿うように三角穂式鉄銚出土古墳が点在し、この形式の銚が水運の場で重視されたことを示唆する。古墳時代後期後半以降の玄界灘沿岸では、前方後円墳の築造が続く地域（宗像など）と続かない地域（福岡平野、糟屋郡南部など）があるが[齊藤2024c]、三角穂式鉄銚は両地域を横断して配付された。内地の諸集団が墳丘形態の差異にはあらわれない論理にもとづいて沖ノ島祭祀に携わったようにみえる。周防灘を望む箕田丸山古墳では、現状で最大長（36cm）の三角穂式鉄銚、および大阪府古市・峯ヶ塚古墳に準ずる馬具や倭装大刀複数振が出土しており、瀬戸内航路を介した近畿中央との通信拠点を思わせる。

三角穂式鉄銚の分布中枢である奈良盆地に目を移すと、多量副葬の初期事例とみられる烏土塚古墳は「平群谷最大の古墳」としても知られる。平群地方は、磐余や飛鳥といった当時の政権中枢と国際港である難波を結ぶ軍事・外交の要衝であった。加藤謙吉は、6世紀後半から7世紀にかけて生じた東アジアの変動のなかで、外交・内政の両面で板挟みにあった倭

王権が水陸交通の要である平群地方を軍事的・外交的に重んじた結果、平群氏や額田部氏、膳氏、紀氏のほか、東漢氏を中心とする渡来系氏族が現地に移住したことにより、当該地の軍事的・外交的機能が高まったと述べる[加藤1989]。

ここで、遣隋使・小野妹子とともに難波津を経由して来日した隋使・裴世清ら^{つばいち}を、海石榴市（現在の奈良県桜井市三輪・金屋周辺）において額田部連比羅夫と「飾騎七十五疋」が迎賓したという『日本書紀』推古16年（608）の記事を想起す。このような情景は『隋書』『倭国伝』にも記されており、田島公はこれを「中国的な外交儀礼」の枠組みで理解する[田島1986]。

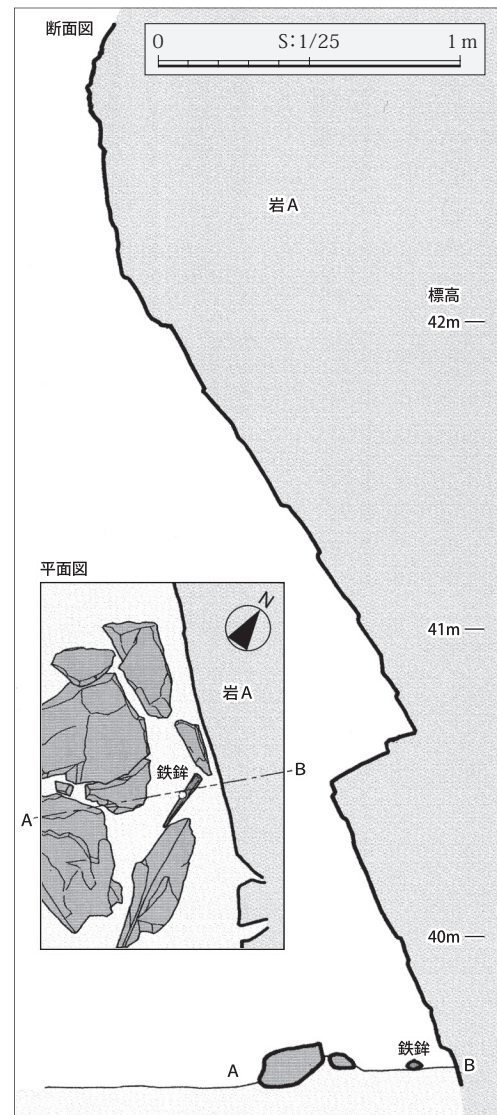


図21 天白磐座遺跡「岩A」Ⅱ区の鉄銚検出状況

馬具型式学の立場から「飾騎七十五疋」の実態に迫る桃崎祐輔は、棘葉形杏葉・鏡板の性格を論じるなかで「対外的に倭政権の権威を誇示する際は、多数の飾り騎が規格化された馬装をなす方が、統一政権の意義を示す上で有効と思われる」「この時期には透彫金銅板にパルメット・鳳凰文をあしらう心葉形鏡板・杏葉の出土例が比較的多く、工芸的に完成度が高い上斉一的な印象を与えるので、推古朝における飾り騎は、この種の馬具を装着した」「棘葉形杏葉には心葉形杏葉を伴う馬具と鏡板の類似や文様板意匠の共有が見られることから、両者を同時に運用する前提があった」と考察する[桃崎2001、33頁]。

心葉形十字文鏡板付轡や棘葉形杏葉が出土した遺跡のなかでも、とりわけ各地域を代表する規模をもつ茨城県赤羽B-1号横穴、風返稲荷山古墳、静岡県賤機山古墳、愛知県馬越長火塚古墳、島根県上塩冶築山古墳、そして沖ノ島で規格生産段階の三角穗式鉄鉾が出土していることを鑑みれば、「飾騎」には馬具を含めた武装全体の統一が志向された可能性すらある。その統一は不完全におわったとしても、玄界灘沿岸に点在する三角穗式鉄鉾出土古墳の被葬者に境界祭祀を含意した外交的機能を投影することは、荒唐無稽な想定ではなからう。

（3）金銅製矛鞘の位相

沖ノ島7号遺跡では有力な後期古墳副葬品に比肩する質実で伝統的な武装具、8号遺跡では華美で先進的・国際的な武器、とくに金属装化初期の頭椎大刀2振分のほか、大加耶系装飾付環頭大刀の責金具が出土した。古墳時代中期以来の倭系武装の伝統を重んじた7号遺跡と、後期後半以降の革新を体現した8号遺跡の共存は、岩陰祭祀段階における沖ノ島の本質を示唆する[齊藤2024a]。金銀色の装具をとまなわない質実な鉄鉾を多量に奉獻した7号遺跡と、金銅製矛鞘という一点豪華主義的な個体を奉獻した8号遺跡の対比もこれに準ずるとみられるが、こうしたありかたは古墳時代後期後半・末における倭の武装体系の縮図をも示している。

古墳時代の武装具を大きく倭系と外来系に分け、前者を倭国内での身分表象、後者を対外的場面で

の身分表象[町田1988、内山2012]として理解するときこそ、金銅製矛鞘が列島と大陸・半島の境界祭祀空間に献じられたことの本質が問われてくる。すなわち、大加耶滅亡や中国隋の南北統一という変革する東アジア勢力地図のなかにあつて、外来系文物の内製化や独自の財体系・身分秩序を整えることは倭が国際社会に台頭するうえでの前提条件だったはずである。大加耶系金工品からの技術移転が倭の武装具の多様化と荘厳化を促したことは[諫早2012、内山2012、金_平2017]、受動的かつ一過的な流行などではなかった。

金銅製矛鞘およびそれに収められた象嵌装鉄鉾にみる既存技術・意匠の集約志向もこのような文脈で読み解けば、それは特定器物の変遷観を支持するのみならず、古代東アジアにおける沖ノ島祭祀そのものを相対化するうえでの突破口をひらくと考える。

5. 結 語

沖ノ島祭祀遺跡の出土品には多くの未報告資料があり、古墳時代研究の深化は既報告資料の再検討をも促している[橋本_達2025、福嶋2025、水野2025]。そうしたなかでの“金銅製矛鞘の再発見”は学史上の必然であり、沖ノ島研究の士気を一層高めた。集団徽章としての鉾や、境界碑という概念も小稿の着想につながっている。多岐にわたる属性を備えた本資料を理解するうえでは金工史・図像学・宗教史・民俗学・地政学的視点からの批判が不可欠であるし、律令期以降の神宝への連続など、論じきれなかった課題も多い。しかしそれらを差し引いてもなお、金銅製矛鞘が古代東アジアにおける鉄鉾の最高峰に位置づけられることは揺るがないだろう。

謝辞 金銅製矛鞘に関する新知見については共著による報告をなしましたが、考察編としての小稿の責任と批判は齊藤個人が負うことを明記します。

末尾となりましたが、小稿執筆の機会と多くのご教示をいただいた「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会の皆様に感謝申しあげます。

註

- (1) 国宝金銅製矛鞘検討会の参加者（*は報告執筆者）
太田 智（宗像市世界遺産課）
岡寺未幾*（福岡県九州国立博物館・世界遺産室）
加藤和歳（九州歴史資料館）
菊池宣行（宗像大社文化局）
齊藤大輔*（島根県立八雲立つ風土記の丘）
西山要一*（奈良大学名誉教授）
橋本達也*（鹿児島大学総合研究博物館）
初村武寛*（公益財団法人元興寺文化財研究所）
福岡真貴子*（宗像大社文化局）
水野敏典*（奈良県立橿原考古学研究所）
山口繁生*（公益財団法人元興寺文化財研究所）
横須賀倫達（文化庁）

- (2) 2025 報告；56-76 頁、山口繁生・初村武寛報文
- (3) 2025 報告；56-76 頁、山口繁生・初村武寛報文
- (4) 2025 報告；56-76 頁、山口繁生・初村武寛報文
- (5) 2025 報告；56-76 頁、山口繁生・初村武寛報文
- (6) 2025 報告；56-76 頁、山口繁生・初村武寛報文
- (7) 2025 報告；77-85 頁、西山要一報文
- (8) 2025 報告；86-89 頁、齊藤大輔報文
- (9) 2025 報告；52-55 頁、福岡真貴子報文

小稿は 2025 報告の考察編という性格上、混乱を防ぐために引き続き「金銅製矛鞘」の名称を用いる。ただし一般には、弥生時代の銅ホコに「矛」、古墳時代の鉄ホコに「銚」を用いることが多い。そのため、ここでは「金銅製矛鞘」に限って「矛」を用いる。

参考文献

- 東 潮 2000「古代東アジアの鬼神と四神図像」『道教と東アジア文化』国際日本文化研究センター
- 網干義教 2002「古墳壁画・墓誌等にみえる朱雀・鳳凰の図像について」『関西大学博物館紀要』8 関西大学博物館
- 諫早直人 2012「九州出土の馬具と朝鮮半島」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研

究会

- 稲田健一 2014「イワキとヒタチ」『海の古墳を考えるⅣ — 列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流 —』海の古墳を考える会
- 岩松 保 2016「境界を設定する儀礼 — 墓域の構造とその計画性から —」『京都府埋蔵文化財論集 7 — 創立 35 周年記念誌 —』京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 臼杵 勲 1985「古墳出土銚の分類と編年」『日本古代文化研究』2 PHALANX — 古墳文化研究会 —
- 内山敏行 2012「装飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 120
- 禹 炳喆 2022「3～6 世紀東アジア国家の武器体系から見た韓半島南部地域出土の倭系武器の認識」『韓日の武器・武具・馬具』九州考古学会・嶺南考古学会
- 岡崎 敬 1979「金銅製龍頭」『宗像 沖ノ島』宗像大社復興期成会
- 尾崎 誠 2018「「庚寅」銘大刀の象嵌に関する論考」『元岡・桑原遺跡群 30 — 元岡古墳群 G-6 号墳・庚寅銘大刀の考察 —』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1355
- 角田徳幸 2017「海士町郡山西古墳の鉄鋌」『島根考古学会誌』34 島根考古学会
- 加藤謙吉 1989「6 世紀後半の政治情勢と藤ノ木古墳 — 平群地方の地域的特性とその史的意義 —」『東アジアの古代文化』59 大和書房
- 金 宇大 2017『金工品から読む古代朝鮮と倭 — 新しい地域関係史へ —』プリミエ・コレクション 79 京都大学学術出版会
- 金 元龍（西谷 正訳）1972『韓国考古学概論』東出版
- 金 性泰 2013「高句麗の武器、武装、馬具」『高句麗の文化と思想』明石書店
- 国宝金銅製矛鞘検討会 2025「沖ノ島 8 号遺跡出土金銅製矛鞘の新知見」『沖ノ島研究』11 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

- 後藤守一 1928『原史時代の武器と武装』雄山閣
- 齊藤大輔 2013「皇南大塚南墳副櫛出土鉄鉾の系譜」『福岡大学考古学論集2 ― 考古学研究室開設25周年記念 ―』福岡大学考古学研究室
- 齊藤大輔 2015「古代東アジアにおける特殊鉄鉾の系譜」『古代武器研究』11 古代武器研究会
- 齊藤大輔 2020a「金鈴塚古墳の武器と銀の武装」『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』第2分冊 考察編 木更津市教育委員会
- 齊藤大輔 2020b「古墳時代後・終末期における武器具流通の実態 ― 三角穂式鉄鉾を事例として ―」『土曜考古』42 土曜考古学研究会
- 齊藤大輔 2022「古墳時代日本列島における東アジア刀剣文化の受容と内製の諸問題」『韓日の武器・武具・馬具』九州考古学会・嶺南考古学会
- 齊藤大輔 2023「古墳時代後期における鉄鉾の変遷」『後期古墳研究の現状と課題Ⅰ ― 交差編年の手がかり ―』中国四国前方後円墳研究会
- 齊藤大輔 2024a「沖ノ島祭祀遺跡の武器と武装」『沖ノ島研究』10 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
- 齊藤大輔 2024b「後期古墳編年における鉄鉾の資料特性」『中四研だより』53 中国四国前方後円墳研究会
- 齊藤大輔 2024c「古墳時代後期の武装と玄界灘沿岸の首長権構造」『地域と交流の考古学』日本考古学協会 2024年度島根大会実行委員会
- 清水みき 1983「湯舟坂2号墳出土環頭大刀の文献的考察」『湯舟坂2号墳』久美浜町文化財調査報告7 久美浜町教育委員会
- 末永雅雄 1941『日本上代の武器』弘文堂書房
- 鈴木一有 1999「鳥装の武人」『国家形成期の考古学 ― 大阪大学考古学研究室10周年記念論集 ―』大阪大学考古学研究室
- 鈴木一有 2018「副葬品組成からみた古墳時代中期から後期への変革」『待兼山考古学論集Ⅲ ― 大阪大学考古学研究室30周年記念論集 ―』大阪大学考古学
- 学友の会
- 高田貫太 1998「古墳副葬鉄鉾の性格」『考古学研究』45-1 考古学研究会
- 高田貫太 2001「三角穂式鉄鉾の基礎的整理」『定東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室
- 高田貫太 2002「朝鮮半島南部地域の三国時代古墳副葬鉄鉾についての予察」『古代武器研究』3 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室
- 高田貫太 2012「柴山江流域における前方後円墳築造の歴史的背景」『古墳時代の考古学』7（内外の交流と時代の潮流）同成社
- 高橋健自 1912「古代の槍」『考古学雑誌』3-3 考古学界
- 田島 公 1986「外交と儀礼」『日本の古代』7（まっつりごとの展開）中央公論社
- 辰巳和弘 2010「門に立つ杖」『日本基層文化論叢』雄山閣
- 田中俊明 2001「高句麗の軍制」『季刊考古学』76（古代の武器・武具・馬具）雄山閣
- 寺前直人 2021「弥生・古墳時代における長柄武器の変遷」『年報人類学研究』12 南山大学人類学研究
- 所
- 寺前直人 2025「古墳に並べられた長柄武器の表象 ― 石見型木製品・埴輪の祖型 ―」『駒澤考古』51 駒沢大学考古学研究室
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1985『伊勢神宝と考古学』
- 西山要一・山口誠治・李午熹 1996「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究（1） ― 日韓文化交流の源点をさぐる」『青丘学術論集』9 韓国文化研究振興財団
- 朴 天秀 1999「装飾鉄鉾の性格とその地域性」『国家形成期の考古学 ― 大阪大学考古学研究室10周年記念論集 ―』大阪大学考古学研究室
- 朴 天秀 2007『加耶と倭 ― 韓半島と日本列島の考古学 ―』講談社選書メチエ 398 講談社
- 橋本達也 2010「古墳時代中期甲冑の終焉とその評価 ― 中期と後期を分かちもの ―」『待兼山考古学

論集Ⅱ — 大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集
—』大阪大学考古学友の会

橋本達也 2025 「沖ノ島遺跡出土の金属製品の現状と
課題 — 甲冑・馬具を中心として —」『沖ノ島研究』
11 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用
協議会

橋本英将 2006 「「折衷系」装飾大刀考」『古代武器研
究』7 古代武器研究会

早野浩二 2023 「鉄鉾の評価」『豊橋市寺西 1 号墳の
研究 (2) 論考編』愛知大学総合郷土研究所

坂 靖 2008 「埴輪・木製立物と「王権」」『王権と
武器と信仰』同成社

樋上 昇 2006 「儀仗の系譜」『考古学研究』52-4
考古学研究会

樋上 昇 2024 「「儀仗の系譜」再論 — 御所市鴨都
波 1 号墳出土「鎧鎧装具」との関連性をめぐって —」
『考古学論叢Ⅳ』関西大学文学部考古学研究室

福嶋真貴子 2025 「国宝沖ノ島出土品の保存活用計画
について」『沖ノ島研究』第 11 号 「神宿る島」宗像・
沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

福永伸哉 2005 「いわゆる継体期における威信財変化
とその意義」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学
文学研究科考古学研究報告 3 大阪大学稲荷塚古墳
発掘調査団

藤井康隆 2025 「魏晋南北朝の刀剣」『古代武器研究』
20 古代武器研究会

藤田和尊・木許 守 2011 「鎧とその表象品」『勝部
明生先生喜寿記念論文集』勝部明生先生喜寿記念論
文集刊行会

穂積裕昌 2018 「儀仗鉾の系譜」『実証の考古学 松
藤和人先生退職記念論文集』同志社大学考古学シ
リーズ 12 同志社大学考古学シリーズ刊行会

町田 章 1976 「環刀の系譜」『研究論集Ⅲ』奈良国
立文化財研究所学報 28

町田 章 1988 「三重県井田川茶臼山古墳の鉄地銀
象嵌掘り環頭大刀について」『井田川茶臼山古墳』
三重県埋蔵文化財調査報告 26

松村武雄 1930 「生杖と占杖 — 一つの覚書 —」『民
俗學論考』大岡山書店

水野敏典 2025 「沖ノ島 7・8 号遺跡出土の鉄製武器
と金属製品の再検討に向けて」『沖ノ島研究』11 「神
宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
宗像神社復興期成会 1958 『沖ノ島 宗像神社沖
津宮祭祀遺跡』

宮代栄一 1996 「古墳時代の金属装鞍の研究 — 鉄地
金銅装鞍を中心に —」『日本考古学』3 日本考古
学協会

茂木雅博 1980 「古墳出土の鉄鉾について」『常陸観
音寺山古墳の研究』

桃崎祐輔 2001 「棘葉形杏葉・鏡板の変遷とその意義」
『筑波大学 先史学・考古学研究』12 筑波大学歴史・
人類学系

弓場紀知 1985 「沖ノ島出土舶載遺物の再検討 —
特に金銅製龍頭の流伝に関して —」『国立歴史
民俗博物館研究報告』7 国立歴史民俗博物館

図出典

図 1～3 宗像神社復興期成会 1958 (一部改変)

図 4 ①②：筆者作成、③～⑦：国宝金銅製矛鞘検討
会 2025 より転載し、各部名称を加筆した

図 5 筆者作成

図 6 1～4：角田 2017
5・6：隠岐島前教育委員会 1986 『黒木の遺跡』
7：隠岐の島町教育委員会 2006 『大座西遺跡
発掘調査報告書』

図 7 1～3：奈良県教育委員会 1972 『烏土塚古墳』
奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 27
4：広陵町教育委員会 1987 『牧野古墳』広陵
町文化財調査報告 1
5：奈良県教育委員会 1960 『奈良県文化財調
査報告 (埋蔵文化財編)』3
6：奈良文化高等学校 2013 『奈良文化高等学
校所蔵考古資料目録 — 伊瀬敏郎コレク
ション —』

- 7 : 奈良県立橿原考古学研究所 1978『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 34
- 8 : 天理市教育委員会 1988『天理市埋蔵文化財調査概報 昭和 61・62 年度』
- 9 : 奈良県教育委員会 1961『奈良県文化財調査報告 (埋蔵文化財編)』4
- 10 : 奈良県教育委員会 1956『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』8
- 図8 1・2 : 宗像神社復興期成会 1958 (再トレース)
3 : 国宝金銅製矛鞘検討会 2025 を改変
7 : 福岡県教育委員会 1974『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ (本文編)』(再トレース)
筆者作成 (4 : 福岡市埋蔵文化財センター、5 : 那珂川市教育委員会、6 : 宇美町立歴史民俗資料館、8 : 福津市教育委員会、9 : 田川市石炭・歴史博物館、10 : 行橋市歴史資料館、11 : 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室、12 : 壱岐市教育委員会)
- 図6～8の地図はweb サイト「川だけ地形地図」
- 図9 筆者作成 (1 : 木更津市郷土博物館金すず、2 : かすみがうら市歴史博物館、3 : いわき市考古資料館)
- 図10 1 : 鈴木勉 2025『藤ノ木古墳金銅製馬具のルーツを辿る』工芸文化研究所
2 : ColBase (https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-8201?locale=ja) をトリミング
3 : 公益財団法人元興寺文化財研究所提供
4 : 群馬県立博物館 1989『唐墓壁画集錦』
- 図11 寺前2025 (一部改変)
- 図12 坂2008 (一部改変)
- 図13 福岡市教育委員会 1981『三築遺跡・次郎丸高石遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 69
- 図14 朱栄憲 1963「薬水里壁画古墳発掘報告」『各地遺跡整理報告』科学出版社
- 図15 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1985
- 図16 宗像大社復興期成会 1979『宗像 沖ノ島』
- 図17 1 : 国宝金銅製矛鞘検討会 2025 を改変
2 : 国立光州博物館 全羅南道・咸平郡『咸平禮德里 新徳古墳』国立光州博物館学術叢書 70 (再トレース)
3 : 朝鮮総督府 1932『慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告』大正 13 年度古蹟調査報告 1
- 図18 筆者作成
- 図19 木更津市教育委員会 2020『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』第 1 分冊 (本文編) (一部改変)
- 図20 2・11 : 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『綿貫観音山古墳Ⅱ』(石室・遺物編) 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 255
3 : 木更津市教育委員会 2020『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』第 1 分冊 (本文編)
4 : 国立文化財研究所 2012『風納土城ⅩⅢ』風納洞 197 番地 (舊未来村) 発掘調査報告書 2 (再トレース)
5 : 国立羅州文化財研究所 2017『羅州伏岩里丁村古墳』(再トレース)
6 : 国立光州博物館 全羅南道・咸平郡『咸平禮德里 新徳古墳』国立光州博物館学術叢書 70 (再トレース)
9 : 三田市教育委員会 1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』三田市文化財調査報告書 2
12 : 公益財団法人元興寺文化財研究所提供
筆者作成 (1 : 天理教埋蔵文化財調査団、7 : 高崎市観音塚考古資料館、8 : 野洲市銅鐸博物館、10 : 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室、13 : 木更津市郷土博物館金のすず、14 : 岡山大学考古学研究室)
- 図21 辰巳和弘 2006『聖なる水の祀りと古代王権 天白磐座遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」033 新泉社 (一部改変)

本誌のデータは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より
閲覧・ダウンロードできます。
<https://www.munakata-archives.asia/>

沖ノ島研究 第12号

令和8(2026)年7月発行

発行：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局：福岡県市町村・地域振興部文化局九博・世界遺産・文化施設課)
〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7番7号

ISBN 978-4-9913533-5-2